演劇は社会の処方箋

やってみようプロジェクト

文化庁委託事業
令和2年度障害者による文化芸術活動推進事業
（文化芸術による共生社会の推進を含む）

公益社団法人 Association of JAPANESE THEATRE COMPANIES
日本劇団協議会

はじめに

福島明夫（日本劇団協議会専務理事／青年劇場代表）

2017年度から始まり今年で五年目の節目の年を迎えるはずだった本事業も、新型コロナ感染拡大とそのためのイベント中止要請、緊急事態宣言の発出などによって、その大半が未実施のまま終わることになりました。もとより本事業は、各劇団や演劇人が全国各地で取り組んでいる演劇的手法を用いた社会包摂活動の社会的、経済的効果を定量的に測定できないかという問題意識から始まったものなので、その点から見ても大変不本意なものになったことは否定できません。ただ、一昨年までのSROI（Social Return on Investment；社会的投資収益率）などの手法を用いての評価分析と数値化の試みから、これまでの数年間の活動によっての変化を測定するＭＳＣという評価手法を用いたことで、このプロジェクトの社会的意義をより言語化することに成功しているように思います。詳細はＭＳＣ評価報告をお読みいただければと思いますが、小野市や不破高校での実践の持っている本質的価値を示すものになったと感じられるからです。つまりこれまでの調査のような一定数の定量的データに基づく評価ではないために客観的に記述したものにはなり得ないとしても、MSC手法によって収集・分析された参加者やスタッフ、地域社会、行政に生まれた質的な「重大な変化」は、事実であり、活動の成果の質的な詳細や、社会に与える意義、波及的な効果を言葉で確認することに成功していると思うのです。そしてそこに刻まれた言葉の一つ一つに説得力を感ずるのです。

また各事業を担当した講師の方々からの報告では、事業実施が困難になった中で単年度ではなく、これまでの複数年にわたる取り組みの振り返り、さらに今年の実施に向けた様々な努力が、自己分析的に書かれているのが特徴的です。特に社会の変化の中で様々な壁に苦しむ参加者たちを前にして、その意欲をどのように引き出していくのかを具体的に知ることが出来ます。この報告部分は、この事業の中間総括的な内容になっていると言ってもよいと思います。現代日本社会におけるひずみが青少年に与えている影響は様々な姿となって現れています。従来から言われてきた「自己肯定感の喪失」も一色ではないのです。個々人の中にどのように具現化してくるのか、そしてそれを克服するための道筋はどのようなものが考えられるのか。講師の方々の様々な試みは、演劇ワークショップの枠組みを大きく超えて社会的な問題提起にもなっていると思います。

またコロナ禍を前にして、事業開催に向けて寄せられた期待や、止むを得ず中止や削減に至った時の失望感、さらに縮小しても実施出来た時の喜びの言葉を前にした時、この事業が参加者に止まらず地域や行政にとっても必須のものとなっているということに気づかされました。一定年数の継続的な実施は、この事業をその地域にとっての必要不可欠なものとしているのです。コミュニケーションがとりづらくなっていることや分断の思考が広がっていることに向き合うことは社会的課題なのです。コロナ禍でなかなか実現できない「集まること」「相互に働きかけ合う場づくり」こそが、生きる上でとても必要なものであること、その確保こそが社会的に求められているのでしょう。

この報告書に綴られている評価、言語が、この事業を全国に拡げる原動力になることを願っています。それはこの事業を求めているのは、現在対象にしている人々に限ったものではなく、もとよりこれらの地域に限られたものではないことを教えているからです。コロナ禍は、これからの演劇の姿を問い直す機会ともなりましたが、問われたのは演劇ではなく、これからの私たちの生き方、お互いの関わりようではないかとこの報告は教えてくれていると思うのです。

CONTENTS

はじめに／福島明夫 2

ワークショップの現場から

高齢者対象コミュニケーションワークショップ「からだであそぼう」／西海真理 6

児童対象コミュニケーションワークショップ「からだであそぼう」／水野千夏 8

青少年対象ワークショップ「若者演劇ワークショップ in 東京」／佐藤文雄 10

障害者対象ワークショップ／島袋寛之・与那嶺圭一 12

青少年対象ワークショップ「さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）演劇ワークショップ

／板倉 哲 14

／大木 隆・松田真吾 16

在日外国人対象ワークショップ「にほんごであそぼう」

／本田千恵子 18

／河嶋榮里子 19

調査研究報告

参加型・質的評価手法MSCの活用 22

「にほんごであそぼう」在日外国人を対象とした演劇ワークショップ 23

岐阜県立不破高等学校 文学座演劇ワークショップ 34

「ようやく、社会包摂が中央省庁の政策に」／衛 紀生 45

参考資料 48

やってみようプロジェクト

ワークショップの現場から

西海真理（劇団朋友）

水野千夏（劇団朋友）

佐藤文雄（劇団銅鑼）

島袋寛之・与那嶺圭一（TEAM SPOT JUMBLE）

板倉哲（秋田雨雀・土方与志記念青年劇場）

大木隆・松田真吾（さいたま市若者自立支援ルーム（桜木））

本田千恵子（兵庫県立ピッコロ劇団）

河嶋榮里子（小野市国際交流協会）

高齢者対象 コミュニケーションワークショップ「からだであそぼう」

協働団体

社会福祉法人はるび「はるびの郷」
白十字会「あきつの里」
東村山市青葉安心ネット
東村山市社会教育福祉協議会
劇団朋友

プログラム内容

多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、高齢者が自由に表現し新たに出会う人とのコミュニケーションの楽しさを体験することで、地域のコミュニティの活性化や身体的・精神的な刺激を通したQOLの向上を目指す。また、施設職員やボランティアの担い手と共に取り組むことで、年齢を超えた共生と互いの学びへとつなげる。

西海真理（朋友）

東京理科大学理学部応用科学科卒業。劇団新人会(現劇団朋友)附属養成所卒業と同時に劇団新人会入団。現在に至る。団内外の数多くの作品に出演するほか、俳優活動以外にも企画、演出も手がけ、また団内の若手養成に務める。2005年度文化庁在外研修員として渡英。アレキサンダーテクニック・ヴォイス・ダンスレッスンの他、ミドルセックス大学でのドラマ教師養成コース聴講をはじめ、幼稚園から高校までドラマ教育の実際を視察。帰国後、ドラマ教育のWSをはじめ、アマチュア劇団や俳優・声優の養成専門学校などでドラマを取り入れた授業を展開している。

コミュニケーションワークショップは平成28年(2016年)から継続的に実施してきました。私たちは演劇的手法を用いたコミュニケーションワークショップで、多様な人々が演劇的表現を実際に体験・体感する機会をつくっています。さらに、これらの活動を社会により広く展開させることで、安心・安全な居場所をつくり、誰ひとり取り残されない社会の実現を目指す活動をしています。

従来の劇団の活動範囲をひろげ新しい協働先を見出すまでとても苦労をしました。高齢者福祉施設、特別支援学校、児童館（学童）、児童養護施設と打合せを重ね、本事業の意義を説明し、少しずつワークショップの実施が始まりました。手探り状態でスタートしたWSでしたが継続していくとともに成果が表れ、協働先の理解も深まっていきました。私たちファシリテーターも、WS参加対象者にはそれぞれ異なった環境があり、異なった問題が存在することを学びました。

参加者はコミュニケーションWSを実際に体験・体感することにより、安心・安全の場で他者理解をし自己肯定感を育み社会生活に生かしていきます。「独居生活者が、社会とのかかわりを持つようになった」「高齢者施設居住者の笑顔が増えた」「身体の症状が改善し、軽度の施設に移動した」等々、様々な変化や感想が寄せられています。多様な人々の演劇的表現を実際に体験・体感する機会が確実に広がってきています。そして更にはその繋がりが新たに精神科病院、認知症高齢者のグループホーム、高齢者地域ボランティアグループ、社会福祉協議会といった地域行政などとの繋がりを生み、次年度以降も、広がりと新たな展開をしていきます。社会包摂の観点から、共生社会の実現を目指し、社会的課題解決の一助となること確信しています。今後さらなる展開を進めていく中では、①本事業の趣旨目的の理解と広報、②事業を実施するための人材の養成と確保、が喫緊の課題でありますが、目的遂行のために努力を続けていきたいと思います。

今年度は高齢者対象の「からだであそぼう」ワークショップは例年のように施設に伺って対面でワークショップをすることが叶わず、「**①高齢者施設に入居の方や、デイサービスに通ってこられる認知度の軽症な方とのzoomWS**」「**②地域の高齢者を含む、青葉安心ネットのスタッフ、準スタッフ、（ほとんどが高齢者）との対面での地域センターなどでのWS**」を行いました。

高齢者とのWSの目的は普段あまり使わない体を動かしたり声を出したり、演劇的ツールの体験を通して想像力と創造力を刺激し、他者理解や自己肯定感を育むことは勿論、楽観脳の活動を活発にして脳内に元気印の物質(セロトニンやオキシトシンetc.)を増やすことです。

①ではそれぞれの参加者がzoomで参加するという環境を作ることも、またzoomを扱える参加者もいないことから、TV画面1画面に少し離れて参加者4人のイスを並べ、職員の方は後ろにイスの間に立って参加し、こちらはファシリテーターの私、アシスタント2人の4画面でのzoomWSとなりました。毎回参加の方もいますが参加者は少しずつ変わっています。その日施設に居る方の中から、zoomの認識や認知症の度合いなどから職員の方が参加の意思を聞いて選んでくださっています。zoomでの集中は対面より難しくまた始めたばかりなのでみなさんの様子を伺いながら進行しました。

高齢者とのWSでは呼吸発声をなるべく取り入れるようにしています。普段あまり意識しない深い呼吸や発声は、脳を刺激して、前向きな気持ちを生み出すセロトニンが増えると言われています。コロナ禍では発声は行ないませんが、マスク越しでゆっくり深く呼吸することを心がけzoomでも吸ったり吐いたりが分かるように手を上げたり下げたりして行っています。手に何か乗っている物をイメージして、その物を画面越しに他の人に渡しあったり、ある人の体の動きを真似したり、自分がリードして動きを作る人になったり。

身体を使った動きでは積極的に動いてくださる方、シャイで照れながらやってくださった方と違いはありましたが、みんなリーダーになって動くことも出来ました。言葉遊びでは「分からない」と思考がストップした方にはお互い助け合う空気も生まれました。短い時間でも、回を重ねることで、脳の活動の活性化に繋がっていると思います。

②青葉安心ネットワーク（東村山市青葉町）の皆さんとのWSは初めての体験です。

例年は高齢者施設「はるびの郷」（東村山市秋津町)に伺って

- ●特別養護老人ホームの皆さん(ほとんどが車椅子で認知症の度合いもさまざま)
- ●デイサービスに通っていらっしゃる皆さん(車椅子の方は少なく歩行器を使ったりゆっくり歩ける方、認知症の方も含む)
- ●地域在住の高齢者(ほとんどが自力で施設に来られる方、認知症の方も少しではありますが参加)

の3つのWSを3年間行っていましたが今年は外部の人間が施設に入ることが叶わず、はるびの郷の協力のもと「青葉安心ネット」の地域在住ボランティアスタッフを対象とした「からだであそぼう」WSを地域センターなどで実施。プログラムの体験を通して感じること、またどう高齢者の方を導いていくのか、どう声掛けしていくのかをシェアしながら進めていきました。初めシャイで「いやだぁ」などと言っていらした方が最後には笑顔で表現したり「何をやらされるかと思ったが知らないうちに引き込まれ、夢中になっていた」「とにかく楽しいのが一番」などの声をいただきました。2回目のWSでは終了しても「雑談しましょう」と提案いただき、かなりの人が残って、感想や来年度も是非やりたいという言葉もいただきました。私から「独居の方などがWS経験を通して外に出ようと思ったり、他の方とのコミュニケーションを楽しんでほしい」と言う話をした際、「私の近くの高齢者たちにも試してみよう」と言う嬉しい声もありました。

WS体験を通して一日の生活が豊かになり、明日への力がわくようなWSを目指している私たちの活動をもっともっと知っていただき、広がっていくよう努力していきたいと私も元気をいただきました。また、今後も続いていくであろうコロナ対策の中で、zoomで出来るコミュニケーションの取り方、つながり方、zoomだからこそ出来るWSを探求していく必要性を感じています。

高齢者施設「はるびの郷」でのWS。
グループワークでコミュニケーション力を高める。

「青葉安心ネット」WS。ボランティアの方々と高齢者の導き方などプログラムを通して意見交換を行った。

児童対象ワークショップ
コミュニケーションワークショップ
『からだであそぼう』

協働団体

社会福祉法人光明会 児童養護施設 杉並学園
杉並区西荻北学童クラブ
劇団朋友

対象者

小学生1～6年生

プログラム内容

多様な演劇的手法を取り入れたワークショップで、子どもたちが自由に表現しコミュニケーションの楽しさを体験し、自己肯定感や他者理解、コミュニケーション能力の向上を目的とする。児童養護施設内では小学1年～6年生を対象に、学童では小学1年～4年生を対象に静止画やインプロなどグループで取り組むプログラムなどを実施。

水野千夏（朋友）

劇団青年座研究所卒業後、劇団新人会(現劇団朋友)入団、現在に至る。劇団朋友ドラマ教育部の中核メンバーとして活躍。劇団内外にて数多くの作品に出演するほか、長年タップダンスに携わり、座タップダンス健康法のインストラクター、その他、ドラマケーションの認定ファシリテーターを取得。エデュケーションWSでは、ケネス・テイラー氏、西海真理氏に長年師事し、現在では講師を務める。

養護施設でのコミュニケーションWS実施

杉並学園(児童養護施設)では、今年度もコミュニケーションWSを継続的に実施することができました。当初施設の入居者のうち、小学生(1～6年生)を対象に実施し、毎回多少の入れ替わりはありましたが10名前後の子どもたちが参加。養護施設に入居している子どもたちの家庭環境はそれぞれ様々なものがあります。個人的な事情は個人情報の件もあり周知していませんが、やはり子ども達には何らかの影響を及ぼしていると考えられます。なかなか溶け込まない子どもや、大人との付き合い方が分からない子ども、その逆で常に大人を求めてくる子ども、なんでもネガティブに捉えて表現してしまう子ども、一言も話さない子ども等々、多種多様な子どもたちでしたが、強く感じたのはみんな優しく仲間を大切にする子どもたちでした。

そんな中、継続的・定期的に心身の安心安全の場を確保し実施してきた演劇的ツールを使ったコミュニケーションWSで子どもたちの日常の変化が担当する先生やスタッフから伝えられ、WSの現場でもその優しさを素直に表現できたり、ネガティブな発言がなくなってきたり、演劇的表現がどんどん豊かになってきている様子が、手に取るように分かるようになってきました。

本年はコロナ禍という対面することができない状況でしたが、2021年2月末に2日間実施することができ、少人数ではありましたが子どもたちも楽しそうにしていたのがとても印象的でした。

西荻北児童館に通う学童の子どもたちを対象に『からだであそぼう』というワークショップを行って今年は4年目。本年度はコロナの影響もあり、こちらも2021年2月に2日間、参加者7名、対面での実施となりました。

この活動の目的は安全・安心な場を確保しつつ「演劇的要素を使用して他者とコミュニケーションをとることを楽しむ」ことです。自発性や**自己肯定感・他者理解**を得ることと、「身体を動かす・リズムや音、言葉を楽しむ」という小さな目的を回ごとに立ててプログラムを作りました。

学童の子どもたちは、参加希望の子による事前申込制になっているので、基本的に参加態度は積極的。「何して遊んでくれるの?」という期待感いっぱいの顔で遊戯室に入ってきます。今回初めての子どもたちですが、今年の実施は3学期ということもあり、子ども同士お互いをよく知っていて仲良く、1年生になりたての時のような幼さも少なく理解度もあると感じました。

例年と違うことは、コロナ禍ということで、マスク着用、触れ合わない、ソーシャルディスタンスを保つ、なるべく大声を出さない、ということを頭にプログラムを考えなくてはならなかった事です。1年生の元気な子どもたちは夢中になるとソーシャルディスタンスも静かにすることも困難。予想はしていましたが、すぐにくっつき、楽しくなるとつい声も大きくなり、私たちが先生に注意される場面もありました。

今回のプログラム作りは、劇団朋友ドラマ教育部のメンバーであるアシスタントにもファシリテーターを経験してもらうため、私が先にメインプログラムを作り、それに向かってどんなワークをしていくのがいいのかをアシスタントが考え、二人で話し合いを重ね全体のプログラムを作りました。

参加者は、後半のメインプログラム「オノマトペを使い身体で表現するワークや物語の登場人物や動物の思っていることを考えるワーク」に向けて徐々にテンションも上がり、距離感が近くなることもしばしばありましたが、たくさんの発想が出てきて最後は時間が足りなくなるくらいでした。今回のワークショップは二日間連続だったので、1日目だけ参加の子は、家に帰って「明日も参加したい」と親御さんに言うほど楽しんでくれたようでした。

例年との違いの一つがやはりマスク。表情が読み取りにくく、子どもたちの変化を瞬時に理解することが難しく感じましたが、アシスタントが2名入ってフォローしてくれたのでアシスタントの存在は大切だと改めて感じました。

今回は、2日間連続で実施できた事が良かったと思います。日をあけず連日実施するのは積み重ねができていると感じました。今回の参加者は、私たちが目的にしている「他者を受け入れる」ということが自然にできていたと思います。2日間参加してくれた子は7人中4人でしたが、2日目の取り組み方が特に積極的でこちらが思いもしない発想が出てきましたし、それに影響されて初めての子からも新しい意見が次々と出てくる、という相乗効果を生んでいました。

たった2日間では成果は語れませんが、2日間でも子どもたちにとっては楽しく有意義な時間だったのではないでしょうか。帰りに「また来てくれるなら、またやる!」とわざわざ言いに来てくれる子がいました。嬉しいことです。

今は対面でのワークショップがやりづらいなか、オンラインでのワークショップにも可能性は見出せそう、と感じる一方、直接触れ合ったり大声を出したり出来ないとしても、同じ空間の中でワークを共有することはやはり大切だと思いました。ワークショップを通じて、身体的にも精神的にも刺激となり、コミュニケーション能力を育んでいただけたらと願ってやまないです。そして、私たち俳優だからこそやれるプログラム作りをして子どもたちに向けてのワークショップを続けていきたいと思っています。

児童養護施設「杉並学園」WS。想像力を使うプログラムを行い、人に対する興味や想像力につなげる。

学童の子どもたちを対象にしたWS。
物語を使ったメインプログラムの様子。

青年対象ワークショップ「若者演劇ワークショップ in 東京」

協働団体

日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会
公益財団法人練馬区文化振興会
劇団銅鑼

対象者

現在就職・就学していない青年

プログラム内容

仲間と共に舞台を作り上げる体験を通して、若年無業者やひきこもりの若者たちに信頼感や自己肯定感を土台とする自己表現力を培ってもらい社会参加へと繋げる。若者自立支援団体等を通じて募集を行い、書類選考と面談で参加者を決定。ストレッチやシアターゲームなどコミュニケーションを図る内容のワークショップを行い、後半は参加者の希望を尊重しながら発表を行う。

佐藤文雄（劇団銅鑼）

俳優・劇団銅鑼代表。1953年生まれ、青森県弘前市出身。国立小樽海員学校卒。船乗りから演劇の世界へ。東京芸術座演劇研究所中退、75年劇団銅鑼入団。主な舞台「センポ・スギハァラ」杉原千畝。98年リトアニア・カウナス市立劇場、ビリニュス国立劇場で研修。「演劇の力を社会に生かす」をテーマに、厚労省「若者自立塾」や中小企業家劇団チーム「KITAYAMA」などの講師。日本劇団協議会「演劇と社会」「演劇と地域」委員歴任。2017年より「やってみようプロジェクト」講師。

はじめに

私が初めて演劇ワークショップを学んだのは、2003年に行われた文化庁・日本劇団協議会主催、講師ケネス・テイラー氏による「ドラマ・イン・エデュケーション」だった。幸いに2年連続受講したことにより、「演劇の力を社会に生かす」実践への足がかりを得た。

その後2005年より2010年まで厚労省「若者自立塾」の演劇ワークショップ講師として活動してきた。

「若者自立塾」は若年無業者、いわゆる「ひきこもり」と言われた若者たちの自立支援の一環で3か月間の合宿生活の中で、演劇が取り入れられ、私たちスタッフも一緒に合宿し、延べ10回前後のワークショップを経て演劇発表し保護者や地域の方々に観劇してもらった。

（詳細は日本劇団協議会「芸術団体における社会包摂活動の調査研究」に掲載）

その試行錯誤が現在の「やってみようプロジェクト・若者演劇ワークショップin東京」のプログラムになっている。私なりに今までの体験から今思うことをまとめてみたい。

若者の特徴と気づいたこと

総じて、真面目な性格、おとなしい、言われたことはできるが、自分からはしない、目を見ない、しゃべらない、何を考えているかわかりにくい、自己評価が低く、失敗してはダメだという意識が強い、ある一定の学力はあるというのが共通項だろうか。もちろん一人ひとり違うし発達障害を抱えている人もいるが、その要因として考えられるのは、家庭、学校教育、社会のあり方や環境が、個を認めない、画一化、均一化、同質を求める風潮や、いじめ問題も当然影響している。そのことが一人ひとりを縛って殻に閉じこもり自己肯定感が持ちにくく、生きづらさ悩みを抱えながら参加してくる。

当初は、私自身も、社会になじめない、働かない若者は怠け者、自分が悪いのだという自己責任論の意識が強かったが、共に生活し、演劇発表の体験でそれは間違いだと気づいた。皆一生懸命自分を変えたい、何とかしたいとこの場に集まってきているのだと。私たちも含め、同じ悩みや生きづらさを抱えている人間同士の場だと。そう気づくと、一人ひとりの個を尊重して、教えるのではなく一緒に何かを創っていこう、創る楽しさや、皆でやり遂げたという達成感を味わおうと意識が変わっていった。
そして、社会の抱えている課題に向き合うという姿勢を私たち自身が若者たちから学んだ。

大切にしていること

私たちの現在のプログラムの初日は、一人ひとり個別のオリエンテーションから始まる。一番大切なことは、悩み抱えている問題やWSに参加する動機を知ることだ。そのうえで、お互いが「安心できる場づくり」に様々なシアターゲームを行っている。緊張を解きほぐす、チームの信頼関係を築くことによって、一人ひとりが考え、意見を述べ、失敗しても大丈夫、何とかなるさ、ありのままの自分をさらけ出せる場、その人を受け入れる場、そして私たちに必要なのは、待つ姿勢、寄り添う姿勢だろう。

プログラムを体験する過程の中で、自然と交流がはじまり、自分という人間を再発見し、他者への信頼、その人の個性がにじみ出てくる。今まで押し殺されていた、閉じ込められていた心の想いが表現されて輝く瞬間、驚きの瞬間が生まれる。それは変化というよりは、一人ひとりが持っていた個性が、今までの生活の中で閉ざしていた殻が壊れ、本来の元の自分に戻るということではないだろうか。（実践活動、報告については、日本劇団協議会発行「演劇は社会の処方箋」や調査研究報告書参照）

発表形式にこだわる理由

私たちのプログラムは最初から一本の芝居を発表することを目的としている。当初合宿形式もあったが、ハードルが高いのではという指摘もあり現在は行っていない。

ではなぜ発表形式にこだわるのか。それは参加してくる若者たちは文化祭的な一緒になにかを創ったり楽しんだりした体験がなかったり少ない事だ。演劇は一人ではできない、色々な人たちの協力や観客が必要だ。誰一人かけても成立しない。また、芝居の世界から学ぶ、役から学ぶことが多く、様々な人間を追体験することによって、社会には様々な多様な、自分とは違う人間の生き方があるのだと発見する。もちろん、発表までのプロセスにはいろいろなことがある。誰でもそうだが、本番を前にして緊張感、恐怖との戦いもある。そこで挫折するのではないか、ハードルが高いのではないかと危惧する声があるが、最後まで一緒に向き合い、誰一人置き去りにしないという私たちの覚悟と、人生に一回かもしれない晴れの舞台を体感してもらいたい、スポットを浴びてもらいたいとう想いの強さがあれば、若者たちは一歩前に踏み出して、それぞれの自分なりの道を歩んでいけるという確信がある。

観客からの感想

こんなにも一つの事に真面目に、一生懸命になれるのはすごい力だ。このような力を発揮できた経験は、参加者の自信にきっとなるだろう。文化芸術は万人にとっての特効薬にはなり得ないが、だれかの人生を変えたり、背中を押したり、勇気づけたりすることがある。本当に微力であるが、その場に関われたかもしれないことに、心から感謝したい。

2020年公演発表『Big brother』

2019年公演発表『グレイス商店街の奇跡』。
参加者によるオリジナル脚本。

障害者対象 ワークショップ

協働団体

こどもサポートはるかぜ
沖縄県聴覚障害者協会青年部
スマイリーはうす
名護療育医療センター
沖縄県立中部農林高校福祉科
公立大学法人名桜大学
TEAM SPOT JUMBLE

対象者

聴覚障害者、発達障害児、障害福祉関係者や学生

プログラム内容

聴覚障害・難聴者と健常者が共に楽しめるワークショップをテーマに、手話が通じないなかで言葉を越えたコミュニケーションを楽しむワークショップを実施。さまざまな障害を持つ子どもたちのワークショップでは、創造的なプログラムを取り入れ創作することの楽しさを体験してもらう。また、介護士を目指す福祉課の学生に授業内で「障害福祉」の理解を深めるワークショップも行う。

島袋寛之
（TEAM SPOT JUMBLE）

与那嶺圭一
（TEAM SPOT JUMBLE）

TEAM SPOT JUMBLE所属。沖縄県を拠点に活動し、ドラマ・CM・舞台と多岐にわたって精力的に活動している。平成23年度より、文部科学省・文化庁事業　「児童生徒のコミュニケーション能力育成に資する芸術表現体験」（次代を担う子どもの文化芸術体験事業）にて、学校現場を中心にワークショップを実施。他、福祉や地域活動、社員研修などの様々なテーマに沿ってプログラムを作り、ニーズに合わせたワークショップを展開している。

２０１１年よりコミュニケーションをテーマとした演劇ワークショップを実施しています。演劇という「正解のない課題」に取り組むことで、コミュニケーションに必要な協調性、共感力、対応力について、参加者が考えるきっかけとなるように心掛けてきました。演劇ワークショップでコミュニケーションをテーマに行う場合、コミュニケーション能力の向上や成果を求めることが目的ではなく、「そもそもコミュニケーションって何だろう？本当に必要か?」という根本的な問題に目を向け、考えるきっかけづくりを目指しています。参加者が本来持っている個性や考えを整理し、他者の様々な意見に触れ、価値観の違いを楽しむ場を提供することが、私達が実施する演劇ワークショップに求められていると感じています。子どもの創造性を高める学習の場面だけでなく、社会的支援、孤立回避、自立支援等のプログラムとして確立できるのでないかと検討・研究、実践を続けています。

今回、「やってみようプロジェクト」では、社会的課題解決・緩和の手段としての演劇ワークショップのあり方を模索し、「打ち合わせ～プログラム開発～実践」のサイクルを目指しました。障害福祉施設などに問い合わせし、現場で抱える悩みなどを伺うと、地域との関わりや他団体との共同した活動が、課題解決に繋がるのではないかと期待されていました。しかし、依頼方法や実施方法が分からず、実現はおろか企画したこともないという状況がほとんどです。また、障害の重さや障害の種類によって対応や準備も異なります。施設によって方針も違い、以前成功したプログラムが、次回の実施先に適合するとは限りません。それらを踏まえて、相談しやすい状況を整え、打ち合わせの時点で求められる効果や目標を明確にし、双方の間で考えにズレがないように努めました。特に今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、より慎重に事を進めなくてはなりません。感染症対策の中でプログラムが実施できるか検討し、修正を加えることも大事な作業の一つでした。

なかでも苦労したのは、マスクや三密を避けることができない参加者が多い中で、感染症対策を万全に整えることができるかどうかです。発達障害を持つ児童の中には、マスクを嫌がり、大人の膝に乗って密着したスキンシップを好む子がいます。また、換気の為に入口を開けておくと自由に出て行き、庭で遊び出します。収集つかない事態です。実施先の職員と連携し、児童に声をかけたり、時には意識をそらしたりしながら進行しました。また、聴覚障害者の皆さんには、読唇できるように講師陣の口元が見えるマウスシールドなどで対応しました。考えうる事態を事前に想定し、打ち合わせ時で確認・検討することが重要だったように感じます。お陰で、無事終えることが出来、参加者の事後アンケートでも不満の声はありませんでした。

一つ一つの依頼に向き合いながらプログラムを開発することによって、依頼者に寄り添った研究・開発、実践活動が可能となりました。しかし、感染症のリスクを避けることで、実施を諦めることとなり、変更や延期を余儀なくされた現場もあります。現場に適したプログラムを検討し、それら成功例を発信していくことも、今後の重要な活動の一つだと考えています。

聴覚障害を持つ方とその家族を対象にしたWＳ。
手話に頼らず「わからない」を楽しんでコミュニケーションを体験する。

発達障害などを持つ子どもたちを対象にしたWS。
グループに分かれ、与えられたテーマについての話し合い。
この時間も「相手に伝える伝わること」について考える重要な時間。

青少年対象ワークショップ「さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）演劇ワークショップ」

協働団体

NPO法人さいたまユースサポートネット
青年劇場

対象者

さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）の利用者

プログラム内容

「若者自立支援ルーム」に集まっている中高生から30代の若者は、ひきこもり、虐待、不登校、貧困など一人ひとり別々の課題を抱えている。社会的に孤立している青少年に演劇ワークショップでコミュニケーションを培いながら、演劇を通して交流し相互理解を深め、表現することにもチャンレジし自立への後押しのひとつとする。今年度は参加者からのリクエストに応え、より演劇の面白さを深く味わってもらうため新たに「劇作ワークショップ」を取り入れ実施した。

板倉 哲（青年劇場）

俳優・演出家。秋田雨雀・土方与志記念青年劇場所属。青年劇場付属養成所卒業。1982年青年劇場入団。主な出演作品「翼をください」（ジェームス三木作・演出）、「島清、世に敗れたり」（松田章一・作、松波喬介・演出）、「星をかすめる風」（シライケイタ作・演出）。演出作品「真珠の首飾り」「キュリー×キュリー」など。2017年より「さいたま市若者自立支援ルーム」でのワークショップの講師を務める。その他東京都内中学校での演劇部の指導や、高演連での演劇講習会での講師など数多く行っている。

4年目を迎えて

さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）（以下ルーム）でこの取り組みを始めたのが2017年。現在では「演劇ワークショップ（以下WS）はルームの看板プログラムです」と職員の方から評価を頂くようになった。元利用者で演劇に参加していたメンバーが就職就学したという報告も聞く。ある男性はアマチュア劇団に参加することになった。彼から「演劇との出会いが自分の人生を変えた」と感謝と決意を綴ったメッセージブックが講師に届いた。本当に嬉しい。では何故僅か3年間でこれほど良い成果に恵まれたのだろう？ 当WSが社会的に注目を浴びる中、講師自身が答えの一例を考えさせられた事があった。

演劇WSを体験してリストカットから卒業できたA君という男性利用者がいる。NHKラジオが彼を取り上げて「演劇がなぜ自殺防止に役立ったか」を考察した（2019年8月放送）。本人・講師・ルームへの丁寧な取材の結果「演劇の場は失敗を許容する」事が理由の一つではないかとまとめられた。A君の場合は職場でのとある出来事がきっかけで極端に失敗を恐れるようになったそうだ。講師と最初に出会った時もピリピリした緊張感を感じた。私たちは「無理そうだったらいつ辞めてもいいよ」「自然な声が魅力的だね」とあまり彼を追い詰めずに向き合った。結果的にはそれが良く作用したらしい。また彼はクリスマス会で多くの観客を前に演じきったという達成感が、自己肯定感と生きる自信につながったとも語った。正しい結果を出し続ける事が求められる「日常」は息苦しい。遊び心と創意工夫が歓迎されありのままの自分が個性として尊ばれる演劇WSは、彼にとって「非日常」のホッとする時間だったのかもしれない。私たち講師陣は「参加者の自由な意思を尊重」して、「面白い事を優先」しながら「演劇を使って遊ぶ」WSであろうと努力してきた。A君の場合にはそういう関わり方がちょうど良かったという事だろうか。

ルームは今年度緊急事態宣言を受けて2020年3月～5月の3か月間閉所を余儀なくされ、再開後もプログラムは様子を見ながら試行錯誤の状態だった。でも大木施設長は演劇WSを心待ちにされていた。年度初日は講師による挨拶代わりのコント上演をすることに決めた。単純に笑えるコントは日常生活の暗さを吹き飛ばすに良いと考えた。

初日の参加者は大木さんの呼びかけのおかげで初参加の4名を含め8名。賑やかなスタートとなった。講師の若手女優2名が体当たりでコントを演じ上々の反応。参加者はやはり自粛期間の中で他人との出会いや笑いに飢えていたようだ。すかさず希望者を募り講師を相手役にして台本を読んでもらう。参加者は交替で演者になり観客になる。最初は3年前から参加し続けてきたB君。講師からの指名を堂々と受けて演じた。彼の達者な演技は参加者を驚かせ喝采を浴びた。それが呼び水となって2回目は初参加のCさんが立候補して演じた。彼女は「人前で演じるという夢が叶った」と嬉しそうだ。そして3回目は初参加のD君。今までは大木さんが何度誘っても演劇に参加しなかったが、この日はノリノリでアドリブを交え楽しそうに演じた。参加者同士の連鎖反応が生まれた。

初日は今年度の典型だった。CさんとD君は創作意欲に火が着いて自らコントを書いた。センスが良く非常に面白かった。彼らは自分の書いた作品がプロの俳優やルーム利用者に演じられることがとても嬉しそうだった。結局二人は劇作WSも含めほぼ毎回参加した。開催したのは毎月2回1時間ずつ。参加メンバーは各回異なるが毎回盛り上がった。

また今年度意識したのは自己紹介の時間と終了後の立ち話の時間を充実させることだ。日常の自分を語り交流する場所があり相手がいる事はルームの趣旨だ。B君やD君は回を重ねるごとに心を開き今まで口にしなかった家族の事や自分の出自を話す様になった。演劇WSが終わるのを待って講師に話しかけてくる元参加者もいる。講師陣は利用者にとって近過ぎず遠過ぎない、程良い非日常の「親戚のおじさんやおばさんやいとこ」位の距離感を保とうと意識している。親でもないが赤の他人でもない、大人の遊び仲間でありたい。

●劇作ワークショップ

今年度の新しい挑戦。E君は2年前からクリスマス会等で多くのシナリオを書いてきたが「我流ではなくちゃんと勉強したい」というニーズに応えようと、プロの劇作家養成に使う本格的なカリキュラムを用意した。一方では彼以外の初心者の方にも満足感を得て欲しいと考え、グループワークで物語を創る事にした。

初日の参加者は大人を含めて8名。男女も年齢も多彩で賑やかなメンバーになった。

「三幕構成」を講義し、ティピカルストーリー（典型の物語）創りをグループワークで実施。即興創作の物語をリレーで繋げた。他者の発想や世界観から刺激を受けたという前向きの感想が多かったが、時間不足で不完全燃焼気味の参加者もいた様だった。講師自身も試行錯誤して新しいことに挑戦しているつもりだが、この回は少し空回りしたようだ。

翌月翌々月はティピカルストーリー創りに加え「キャラクターカード」からの物語創り。4回目は既成戯曲を読み合わせ、物語の続編を皆で想像して語る形式にした。この回は自然な流れで参加者の達成感を得られた様に感じた。初参加のF君が見学で参加したのだが、途中から積極的になり台本の読み合わせに参加。続編創りでも個性的な解釈を沢山発言した。「楽しかった。是非また参加したい」と見違える様な笑顔になったことは収穫だ。

●感染症対策

緊急事態宣言を受けルームも「一つのプログラムに付き定員は5名まで」「大声は控える」とさいたま市から要請された。演劇WSは「定員の順守・手指の消毒・マスク着用・身体接触の回避」を実施した。また講師がPCR検査を毎月受けられたことはメンバーからもルームからも好評だった。

●課題の達成

大木施設長からの評価を伺う限り、掲げた目標は一定の水準で達成できたと思う。尚長期計画で予定していた彩の国さいたま芸術劇場とのコラボレーション企画については、諸般の事情に鑑み今年度は追求をしなかった。

役に応じて声色を変えアドリブも。
演劇プログラムは参加者の笑いがたえない時間になっている。

青少年対象ワークショップ「さいたま市若者自立支援ルーム(桜木) 演劇ワークショップ」

大木 隆
（NPO法人さいたまユースサポートネット/
さいたま市若者自立支援ルーム桜木所長）

今年で4年目になる演劇ワークショップ。「さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）（以下、自立支援ルーム）」にとっては看板プログラムと言えるくらい多くの利用者さんにとって活性化している場となっています。実際に参加メンバーの活き活きとした姿は他の利用者さんにも良い影響を広げています。令和元年度12月に行われたクリスマス会を観た利用者さんからも、「今度は自分達が演劇ワークショップに参加してみたい」という意欲的な声が複数上がっていました。

そんな良い流れができていた頃合いでしたが、2020年に入ってからすぐに新型コロナウイルス感染拡大の影響で5月まで自立支援ルームは閉室を余儀なくされてしまいました。人と人とが密になるようなプログラムは制限せざるを得なくて、つながりを求めて来る利用者さん達にとってはストレスや不満を与えてしまっていたところでした。7月、8月、9月と三カ月が経ち、利用者さんも徐々に戻って来た時期に、演劇ワークショップ再開のお声をかけていただきました。

当時の自立支援ルーム内では、新しい生活様式が定着しつつある時期で、コロナ禍以前のように活き活きと取り組めるようなプログラムを模索していたところでもありました。「あの演劇ワークショップが再始動する」と耳にした利用者さん達は好奇心や物珍しさのような心境で初回に顔を覗かせていました。その中には、演劇ワークショップ発足当初から継続していたメンバーもいて、貫禄のある寸劇を新しい参加者に披露してくれました。普段目にするクールな青年とは打って変わって、活き活きと参加している姿が胸を打ったのか、初めてのメンバーもそのまま即興で参加するというサプライズも起きました。その利用者さんはこれまで人前で話すことを苦手としており、そんな自分を克服したいという思いを持っていたようですが、なかなか踏み出す機会がなかったところ、きっかけを与えてもらえる場となったのです。演劇ワークショップの時間は、決して個性や意見を否定されずに、ありのままを認めて受け入れてもらえる温かい空気が流れています。参加の中には、人前に立つこと、他者に認めてもらうことの楽しみに気づいたのか、その晩徹夜をしてオリジナルの脚本を書き上げるという行動に移った利用者さんもいました。初めて本気で一つの物事に取り組んだようで、その後自分の作った脚本が他の参加者と講師が演じてみるという感動体験を通して喜びを覚えたようです。

ワークショップに参加することで、自立の一歩を踏み出した若者もいます。Bさんは、人前で自分を表現することに対して苦手意識を持っていましたが、クリスマス会では主役を務めあげ、その後就職のトレーニング等を重ね、希望した職場に就職することが決まりました。

今年の1月下旬からは再び新型コロナウイルス感染拡大の影響でルーム閉室を余儀なくされてしまい、予定していた演劇ワークショップを中止することになりましたが、参加したメンバー達は新しい脚本作品を作成する等、未来に向けて創作意欲に満ちています。

次年度もコロナ禍に合わせた新しい取り組みが必要ですが、若者達の活力を見出せるきっかけ作りとして演劇ワークショップをともに創り上げていければと思います。

さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）。
さまざまな困難を抱えた子ども・若者とその家族が安心できる地域の居場所。

大木 隆／さいたま市若者自立支援ルーム（桜木）演劇ワークショップに3年連続参加してきました。クリスマス会や文化発表会では、キャラクターに扮装しながら全力で演じ切るような場も設けていただき、人の前に立つことの醍醐味を体感しました。コロナ禍では演劇ワークショップで培った「演劇をすることの楽しみ」を職員間で活かしたハロウィンイベントを実施することもでき、利用者さんと楽しいひと時を共有できました。今では演劇ワークショップを誰よりも楽しみにしている一人です。

松田真吾
（さいたま若者自立支援ルーム（桜木）職員）

閉室期間中、また再開後しばらくは演劇ワークショップ（以下WS）も規模を縮小しての開催あるいは中止となりましたが、嬉しいことに10月より演劇WSが再開となり、予定表を見て「演劇がある！」とはしゃぐ利用者の方をみて、演劇WSが自立支援ルームにおける存在の大きさを改めて感じました。

参加した利用者の方々は、楽しみながら演劇WSに参加し、多くの物事を学び取ることができました。今年度から参加したAさんは、元々演劇に興味があったのか、物怖じせずメンバーの前でセリフを読んだり、また劇作にも取り組み、家で台本を書いてくるなど、とても積極的に活動しています。B君は初め見学だけの参加で、何かにつけて参加を渋っていました。演劇WSに参加してみたい気持ちは持っていましたが、それ以上に新たな環境への不安が大きかったのだと思います。しかし、講師の方たちが継続して声掛けをしていくうちに、段々と警戒心を解き輪の中へ入るようになりました。今ではWSの中心人物として活躍し、演劇のない日でも劇作作りに取り組むなど精力的に活動しています。このWSで、演劇・劇作という未知の世界に飛び込み、コント創作という結果を出すという、激動の1年だったと思います。WSに直接参加はしないけれど度々部屋を覗きに来るCさん。知り合いの利用者さんやルーム職員、劇団員の方を見に来ているのです。活動後には、感想を伝えに来たり雑談をしに来ます。演劇WSでは、その参加者だけでなく、周囲の利用者にも影響を与えているのです。演劇WSがきっかけで、利用者の新たな関りが生まれることも多くあります。

演劇WSに参加する利用者の多くは、「何か」を発散することを目的としていることが多く見受けられます。「何か」とは、元気いっぱいな感情、悲しみや寂しさの感情、はたまた運動不足でなまった体など、人それぞれです。そんな利用者の方々が、普段の生活の中では発散することのできない様々な「何か」を発散できる場所が、演劇WSだと私は捉えています。職員である私も、演劇WSを通して利用者が発散する様々な感情を受け止め、あるいは受け流し、またある時は押し返しています。このような感情を大きく動かす活動は普段なかなか出来ません。同時に、貴重なこの場を講師の方たちと職員とが協力し、主役である利用者の方々が大立ち回りできるよう、セッティングしていかなければならないと思います。今後とも、演劇WSが続けられることを利用者と共に願っています。

看板プログラムとなっている演劇WS。
演劇を通じて繋がる楽しさや喜びを発見する。

松田真吾／R2年度よりさいたま市若者自立支援ルーム（桜木）に配属。自立支援ルームでは学生時代よりボランティアとして様々な活動に参加。ボランティア時、ルームで初めての演劇ワークショップにて板倉哲さん作「メリークリスマス」にカナダの教会から来た神父、リンカーン役で初参加。緊張の初舞台を経験するとともに、演劇ワークショップの楽しさを知る。以後、演劇ワークショップには、不定期ですが利用者と共に、様々な体験を分かち合いながら参加しています。

NPO法人さいたまユースサポートネット

さいたま市を拠点とし、貧困・いじめ・障がい・不登校・外国ルーツなど様々な困難を抱えて孤立する子ども・若者を対象に、地域の多様な支援ネットワークと協同しながら、居場所づくりや進路実現の応援をしている。たまり場、さいたま市学習支援教室、さいたま市若者自立支援ルーム、地域若者サポートステーションさいたま、高校生自立支援事業など事業を展開。

在日外国人対象ワークショップ『にほんごであそぼう』

協働団体

NPO法人北播磨市民活動支援センター
（小野市うるおい交流館エクラ）
NPO法人小野市国際交流協会
兵庫県立ピッコロ劇団

対象者

小野市に在住の
外国人、日本人、外国人を雇用している企業

プログラム内容

兵庫県小野市の人口は5万人弱、在住の外国人は約900人あまり。国際交流協会が実施する日本語教室には100名強が参加するが、地域の日本人と交流する機会は少なく、ゴミ出しなど日常生活の行き違いが社会課題となっている。当初は対象を在日外国人のみとしたが、翌年には彼らが働く職場の日本人とその家族、小野市の職員・議員、警察官など、地域の日本人も参加できる回を設定。コミュニケーションを深め、日本語をつかうことを楽しみ、自信をもってもらうことを目的としている。

本田千恵子（兵庫県立ピッコロ劇団）

俳優・兵庫県立ピッコロ劇団所属。日本大学芸術学部演劇学科演技コース卒。文学座附属演劇研究所本科、研修科修了。1998年ピッコロ劇団入団。甲南女子大学文学部メディア表現学科、大阪芸術大学舞台芸術学科、関西学院大学文学部ほか多数で講師を務める。平成27年度兵庫県芸術奨励賞受賞。「のじぎく兵庫国体開会式」、「阪神淡路大震災メモリアルコンサート」、「ひょうご文化交流のつどい」などで司会多数。

3年前に始動した『にほんごであそぼう』。兵庫県小野市にある、小野市国際交流協会、小野市うるおい交流館エクラ、兵庫県立ピッコロ劇団、そして日本劇団協議会が、何度も現地で協議を重ね、小野市の地域課題解決の一翼を担うことを目標に、在住する外国人の方々の生活に向き合った。このプロジェクトの強さと基盤は"地域との連携"にある。

初年度(2018)の気付き

初年度、話し合いを重ねる中で、外国人の方々を取り巻く環境について、あらためて気付かされたことが沢山あった。"外国人同士や日本人との交流機会の少なさ"　"日本人の誤解"　"言葉の壁による生活への影響"etc. 母国で優秀だった少年が、日本で引きこもりになっている現状も知った。

私達演劇人に何が出来るのか？私は当初、日本語の学びの一環として日本の昔話を題材に芝居作りをする案を持っていた。しかし話し合いを重ねるうちに、何かが違うと感じ、取り下げた。彼らにとって数少ない日本人との交流、それがまさに私達なのだと気づく。国際交流協会の日々の活動経験値と機動力に支えられながら、安心して"日本語を使える場"を目指した。

様々な国籍、年齢の外国の方々、更には日本人までもが参加をして下さった。あの引きこもりの少年も。彼に会えた時、私達は心の底から、やって良かったと思った。終了後もロビーに集まってお喋りをしたり、アドレス交換をしている彼らの様子から、安心感をほんの少し持ってもらえた、そう思っていい気がした。こんな方向性、可能性もあると体感した。

2年目(2019)の挑戦

2年目は外国人の方々が働く企業にもアプローチをした。仕事場とは異なる場を共有するなかで相互理解を深められないだろうか。参加状況は企業によって異なったが、日本人上司がお子さんを連れて参加して下さった企業もあった。最終日は前年度以上に多国籍かつ50名を越えた参加者数。リピーターメンバーもいた。衆議院議員、市議会議員、他の市職員、大学・高校教員等の方々の見学や参加でギャラリーも多数。繋がりが広がり始め、続けていくことの価値を感じた2年目だった。

そして3年目(2020)は

今年度は揺れた年だった。コロナの影響で夏の開催予定を延期に。オンライン開催も模索しつつ、状況が落ち着きを見せた時期に再び対面での開催を目指した。内容も参加者に不安を与えないよう距離や発語などに意識を配り、いくつものプランを考えた。しかし情勢を見極め、様々な状況を考慮した結果、今年度は中止とした。

初めて耳にするコロナという名の感染症、初めて体験する緊急事態宣言や外出自粛、初めて見る全ての人々がマスクしているさま……。この1年、日本人でさえ孤独や不安を抱え過ごしてきた。だとしたら日本で生きる外国人の方々は私達以上に孤立を深めているだろう。少しでもやすらげる時間を創りだせたなら。そんな思いの3年目だった。

3年目の新たな広がりの一つに兵庫県加東市での開催があった。小野市に隣接する加東市がお声をかけて下さり、既に打合せまでも。小野市同様中止とはなったが、開催を願い御尽力下さった加東市のみなさまに感謝致します。いつか必ず。

来年度(2021)とその先へ

来年度、"にほんごであそぼう"が開催できるのか、現時点では全くわからない。でもここ日本には、日本人と同様に生活し、日本人と同様に生きるために悩む海外の方々がいる。たとえ形を変えようとも、演劇という人間を考える芸術のその可能性に腹を括れば、出来ることはきっとある。

「にほんごであそぼう」ワークショップ。参加者が安心して日本語が使える場。回を重ねるごとに繋がりが広がる。

河嶋榮里子
（NPO法人小野市国際交流協会　副理事長）

NPO法人小野市国際交流協会　副理事長。協会事業の中でも、日本語教室、子ども日本語教室の主担当であり、市内に住む外国人や外国にルーツを持つ子どもたちのサポートをしている。また日本の子どもたちのためにも、子ども国際交流「ふれあいキッズ」や、市内の小中学校へ外国人を派遣して交流授業を行う「国際理解教育活動コーディネート」を通じて、国際感覚を身につけて心豊かに成長する子どもの姿を願い日々応援している。小野市教育委員。

3年前「にほんごであそぼう」という名前をつけた演劇WSを、市内近郊に住む外国の方々を対象に開催した。1年目の3回は外国人だけの参加、2年目は4回と回数を増やし、彼らが働く会社、市役所の人権担当、市議会議員、警察官、そして市民へと広く声をかけ参加していただいた。結果は大成功！私たち国際交流協会は地域に住む外国人の声はもとより、彼らが働く企業の担当者、外国人との共生に必要を感じている方々の思いを直接お聞きすることが出来た。それにより見えなかった部分での学びの機会をいただき、2年続けたこの演劇WSのお陰で、小野市の多文化共生が大きく前進したと自負しているところである。

今年度も開催が出来ると嬉しいご報告をいただき、兵庫県立ピッコロの劇団の担当の方々と話を進め、7月8月と合計4回の開催を予定し楽しみにみんな胸をワクワクさせていた。しか

在日外国人対象ワークショップ『にほんごであそぼう』

し春に出た緊急事態宣言により、日本語教室もやむを得ず休講となり、それに伴いワークショップも中止となった。教室の中で毎週会っていた学習者ともお互いに会えない日々が続いた。解除後もなかなかスタートができず、学習者も指導ボランティアの先生もモヤモヤしていた。日本語教室を早く再開し、みんなの顔を見てどんな状況か確かめたいという思いはあっても、学習者と先生が接近して話す場面の多い教室は、どんなに感染予防対策を徹底しても不安があった。もしここがクラスター発生の場所となったらと想像すると、なかなか再スタートが出来なかった。実際に近隣の外国人が多く働く会社内でクラスターが発生し、会社もしばらく閉鎖となった。その原因が彼らにあるかどうかわからない中、まわりからは偏見の目で見られ落ち込んでいる外国人がいると耳に入ってくる。コロナに感染することよりも、感染したことにより向けられる視線が怖いのだと。

会社の中には彼らの行動範囲を厳しく制限しているところもあるが、それも仕方がないことだと理解できる。だからこそどうしているかと彼らのことが気になり、SNSを通じてメッセージを送った。「元気ですか?」「みんなに会いたいです!」返信のほとんどが、「げんきです。」「コロナがこわいです!」「コロナがこわいですから〇〇できません。」「かぞくがしんぱいです」若い彼らが母国にいる家族の健康を願い、不安を抱えながらも日本で一生懸命に頑張る姿に、一日も早いコロナの終息を切に願うばかりだ。

だからこそ「にほんごであそぼう」のWSの必要性をあらためて感じる。何と言ってもファシリテーターであるピッコロ劇団の劇団員たちの魅力に参加者全員が惹きつけられるからである。毎回、参加者リストを元に、事前に劇団員と協会のスタッフでWSの内容を相談し情報を共有する。当日は日本語のレベルも出身国も宗教も違う人たちの中で、この言語に頼らない演劇WSは、参加した誰もが臆することなく笑顔になれる場所、ひとりひとりを輝かせてくれる場所になっていた。これはプロの技だと毎回感心する。そんな雰囲気の中で参加した人と人とが繋がれたからこそ、当初期待していた展開以上の結果が出たのだと思う。今後も一層この演劇WSを外国人とステークホルダーへ繋げていきたいと思う。

今、次に参加していただきたい人たちの顔が次々と目に浮かぶ。早くみんなで笑い合いたい!

最後に、このような活動の場所をいただきお世話になった全ての関係者の皆様に心から感謝を申し上げたい。

参加した誰もが国籍・宗教関係なく笑顔になれる時間だ。

NPO法人小野市国際交流協会

小野市を中心とした周辺地域の住民と在住する外国人に対して、国際間の相互理解を深めるために、語学教室、国際親善交流、国際交流情報交換・提ども及び外国人生活相談等に関する事業を行い、多文化共生の理念に基づき互いの文化や価値観の違いを認め尊重しあえる平和な社会の創造に寄与することを目的とした団体。在日外国人への日本語学習支援、生活相談など地域に根付いた活動を行っている。

調査研究報告

田中博（一般社団法人参加型評価センター）

「にほんごであそぼう」在日外国人を対象とした演劇ワークショップ

岐阜県立不破高等学校「文学座演劇ワークショップ」

参加型・質的評価手法MSCの活用

本プログラムの評価には、参加型・質的評価手法であるMSC（Most Significant Change）を採用して、演劇ワークショップが始まってから現在までの関係者に起こった「重大な変化」をエピソードの形で収集、分析しました。

1. MSC（Most Significant Change）とは？

1990年代にリック・デイビースによって考案された、参加型・質的評価手法です。Most Significant Changeとは、「最も重大な変化」という意味です。「重大」に関しては、量が大きいというよりも、「意義がある」「意味深い」という内容です。社会や人間の意識や行動の変容など、数量化できない変化の把握や分析に効果的です。オックスファムなど欧米のNGOによる国際協力活動で多く実施されており、教育や福祉など、人間を対象としたプログラムの改善志向の評価に有効とされています。

2. なぜMSCを活用したか

「やってみようプロジェクト」における演劇ワークショップ（WS）は、演劇を通じて参加者にはたらきかけ、参加者の意識や行動に変容を起こすことを共通の目的としています。このような変化は一般的に数量化・定量化できない、もしくは難しいため、従来のロジックモデルの指標を計測する方法のみでは、平均的な進捗はわかっても、「一人一人にどのような変化のプロセスがあったのか」「変化の背景にはどのような要因があったのか」「どうすればプログラムをより良く改善できるのか」といった質的（定性的）な現状の詳細を把握したり、分析したりすることは困難です。これに対して、MSCは現場から「重大な変化」をエピソードの形で集め、それらを比較検討し「最も重大な変化」を選ぶ過程を通じて、変化の詳細やプロセス、背景を把握し、またプログラムを改善していく教訓を学ぶことができるのです。

3. MSCの3つの特徴

1 質的（定性的評価）である

活動現場で起こった変化をいきいきとしたエピソード（物語）の形で収集します。数字におきかえることができない、もしくは適切でない変化の詳細を把握することができ、またその変化の背景にある促進要因や阻害要因を分析することが可能です。

2 参加型評価である

外部の専門家が一方的に調査し、判断する従来型評価と異なり、受益者やスタッフなど幅広い利害関係者が、エピソードの収集や選択に参加します。この過程を通じて、現場の視点が評価結果に反映されるとともに、参加した関係者の当事者意識やモチベーションの向上につながります。

3 組織学習を生む

MSC評価を通じて、活動をふりかえり、教訓を得てプログラム（活動）が改善されるとともに、プログラムを実施している組織自体が成長するといわれています。また評価に多くの関係者が参加することで、受益者とスタッフなど、関係者同士の相互理解を促進する特徴があります。

田中 博

一般社団法人参加型評価センター代表理事、日本評価学会認定資格評価士。（NPO法人）ヒマラヤ保全協会事務局長として10年以上、ネパール農村での参加型開発に関わる。英国サセックス大学国際開発研究所大学院修了。国際協力機構（JICA）や(NPO法人）国際協力NGOセンター（JANIC)、トヨタ財団、環境省などで評価に関する研修講師、NGO/NPOの海外・国内プロジェクトの評価ファシリテーターを多数行う。JICA草の根技協評価スキーム検討委員や、(NPO法人）日本NPOセンター、(公財）京都市ユースサービス協会などで評価アドバイザーを務めた。共著に「自分達で事業を改善できるようになった！」源由理子編著（2016）『参加型評価～改善と改革のための評価の実践』晃洋書房、がある。tanaka.pecenter@gmail.com

Rick Davies, Jess Dart (2005) "The 'Most Significant Change' (MSC) Technique: A Guide to Its Use

小野市「にほんごであそぼう」MSC 評価報告

1 背景・目的・プログラム概要

本プログラムは、兵庫県小野市在住の外国人を対象として実施される演劇ワークショップ（以下WS）である。一昨年度（2018）より実施しており、2019年度は7月から9月にかけて合計4回実施された。WSは小野市うるおい交流館エクラ（NPO法人北播磨市民活動センター）と小野市国際交流協会と兵庫県立ピッコロ劇団が協働をして、小野市周辺在住の外国人（特に、子どもと若者）を対象として実施している。

1 小野市在住外国人に関する課題

小野市の人口5万人弱に対して、市内在住の外国人は30カ国から約907名（2020年1月）が在住している。そのうち、小野市国際交流協会が開催する日本語教室の登録者数は、小学生～50代の120～130名程度である。在住外国人が抱えている問題としては、以下のようなものがあげられる。

- 小野市の在住外国人は技能実習生として近隣の工業団地等で働く人々が多いが、ふだん、職場を越えて外国人同士、また日本人と親しく接することは少ない。
- 中には日本語の習得に熱心な方々も多く、小野市国際交流協会が主催する日本語教室や交流行事には多くの参加者がある。しかし、それら教室や行事に参加しない（できない）外国人もおり、地域社会から孤立している。
- 外国にルーツをもつ子どもについては、日本語による授業についていけず学校内で孤立してしまうこともある。特に思春期となると言葉の壁から引きこもりになっている子どももいる。

上記のような問題の一因として、地域の日本人と外国人がお互いに理解しようとする場所、コミュニケーションを取る機会が不足していることが考えられる。兵庫県立ピッコロ劇団、エクラ、小野市国際交流協会の3者は、日本語教室に参加していない人も集まれるような場所として本WSを企画した。

2 プログラムの目的

地域の外国人および職場や地域の日本人が集い、日本語と身体をつかった表現活動を行う。ふだんの仕事や日常生活

では機会が少ないと思われる深く親しいコミュニケーションを体験してもらうことで、地域における外国人同士、そして外国人と日本人の相互理解、コミュニティづくりを促進する。特に日本の生活になじめない外国人やその子ども、家族の参加を促し、今後の地域社会への参加へとつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす。

3 実施体制

以下３団体が主体となって協働する。また外国人が働く事業所の担当者、行政担当者の参加、連携をはかることを予定した。

- ●地域活動団体：NPO法人小野市国際交流協会
- ●地域文化施設：小野市うるおい交流館エクラ（NPO法人北播磨市民活動支援センター）
- ●地域芸術団体：兵庫県立ピッコロ劇団（公益財団法人兵庫県芸術文化協会／兵庫県立尼崎青少年創造劇場）

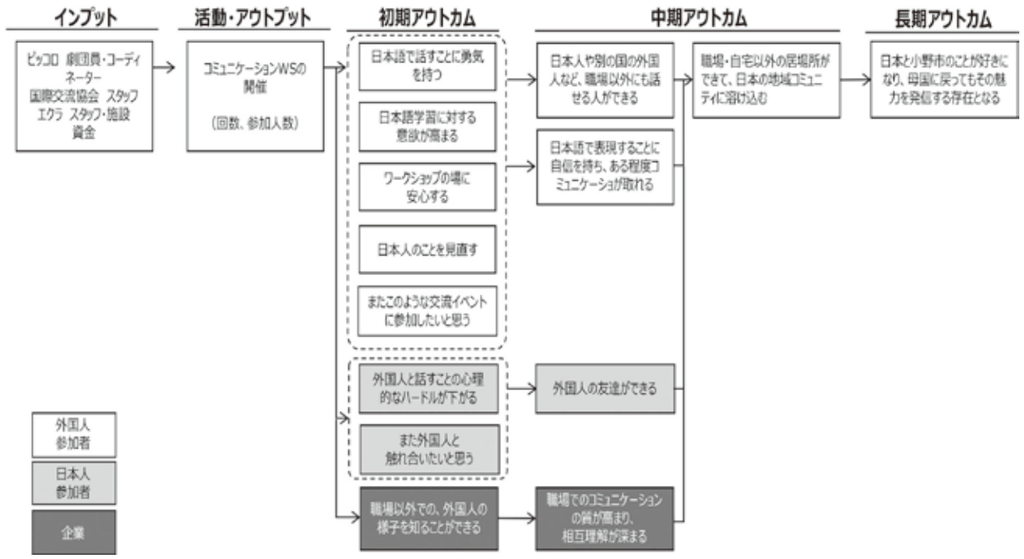
4 実施概要

- ●内容：日本語を使ったコミュニケーションゲームや表現活動を体験。身近な生活を題材とした場面や風景、簡単な物語などを、グループで力を合わせて表現し、互いに鑑賞し合う。
- ●対象：小野市および周辺に居住生活する外国人と、関係の深い職場や地域の日本人　10～40名
- ●日程：令和２年７月～８月のあいだの日曜日、４回　各日14:00～16:30　（予定）
- ●講師：兵庫県立ピッコロ劇団員３～５名（参加者数に応じる）
- ●会場：小野市うるおい交流館エクラ大会議室

5 外国人対象ワークショップの概要とロジックモデル

参考までに昨年度作成されたロジックモデルを載せる。期待される成果には主に以下のようなものがある。（図1）

図1　ロジックモデル



＜外国人参加者にとって＞

- ●これまで小野市国際交流協会につながっていなかった外国人がつながる
- ●また外国人参加者がワークショップの場に安心し日本語で話す成功体験を得る。それによって日本語で話すことに自信を持ち、積極的にコミュニケーションが取れるようになる。
- ●日本人や別の国の外国人など、職場以外にも話せる人ができる。
- ●職場・自宅以外の居場所ができて、日本の地域コミュニティにとけこむ。

＜日本人参加者にとって＞

- ●外国人と話すことの心理的なハードルが下がり、また外国人と触れ合いたいと思う。
- ●外国人の友達ができる。

＜協力企業にとって＞

- ●職場以外での、外国人の様子を知ることができる。
- ●職場でのコミュニケーションの質が高まり、日本人従業員と外国人従業員の相互理解が深まる。

6 これまで確認されてきた成果

昨年度実施された調査による、関係者14名の五段階評価による本WS総括のレーティングは以下表1のようになり、高い有効性が示されている。詳細は昨年度報告書を参照のこと。

表1　昨年度WSの総括評価結果

	総括の視点	総括成果	平均点（5段階）
1	調査分析の妥当性（ニーズ）	ある程度良い	4.1
2	内容の妥当性（セオリー）	ある程度良い	4.3
3	実施の十分性・適切性（プロセス）	ある程度良い	4.3
4	成果・効果（アウトカム）	ある程度良い	4.3
5	持続可能性	大いに良い	4.6

2 令和2年度における小野市の状況と対応

1 新型コロナウィルス感染拡大とWSの中止、代替案の模索

令和2年度もWS実施計画が立案され、その効果を検証する調査も並行して実施される予定であった。しかしながら、世界的に発生した新型コロナウィルス感染拡大の影響により、全てのWSが中止されるという事態に陥った。そのため、当初予定していた調査者によるWSの観察、参加者への定量的アンケートやインタビューといったデータ収集・分析の実施が不可能となった。このような理由により調査の視点を変え、量的調査・有効性を中心としたものではなく、WS開始以降これまでにその影響で起こった関係者の様々な変化について、質的（定性的）データ収集及び分析を、国際交流協会理事へ質問紙調査とオンライン・ミーティングを通じて実施することに変更した。手法には、欧米の国際協力NGOが多用しているMSC（モスト・シグニフィカント・チェンジ）手法を採用した。これは活動現場で起こった「重大な変化」を変化の起こった分野（領域）ごとにエピソードの形で複数収集し、それらの中から「最も重大な変化」を関係者の参加で一つ選択する過程を通じて、質的変化を把握・分析するものである。人間の意識・行動変容など定量化できない質的変化をいきいきと把握したり、ロジックモデルで想定できなかった波及的な変化を把握したりできる特徴がある。また変化の背景にある促進・阻害要因を分析し、活動を改善させる教訓を学習する利点があるといわれている。詳しくは「参加型・質的評価手法MSCの活用」を参照されたい。

2 MSC手法による評価の目的

評価の目的は、「これまでの演劇ワークショップの影響で、小野市の個人（市民＝地域住民&外国人）、地域社会、行政に起こった質的な変化の詳細や波及的な変化を把握するとともに、変化の背景にある要因を分析し、今後の活動に活かしていく」とした。

3 データ収集及びオンライン・ミーティング開催の経緯

小野市国際交流協会理事の河嶋氏と藤田氏、ピッコロ劇団の本田氏（講師）、田窪氏（コーディネーター）を情報源とし、彼らの経験に基づきデータ収集を行った。MSCの基本設問は、時間の範囲を「演劇ワークショップがはじまってから今まで」とし、変化の領域を下記のように3種類設定し「重大な変化」をそれぞれ3編ずつ収集した。

- 個人（市民&外国人）に起こった変化
- 小野市の地域社会に起こった変化
- 小野市の行政に起こった変化

事前に小野市国際交流協会に各領域で起こったエピソードを質問紙に記入、提出してもらい、それを活用して2021年1月15日にオンライン（Zoom）によるミーティングを行った。調査者の進行で、上記4名の参加で各領域から「最も重大な変化」のエピソードを1編選択する作業を行った。

4 本調査の長所とその限界

MSC手法によって収集・分析された質的な「重大な変化」は、事実であり、それらを理解することで活動の成果の質的な詳細や、社会に与える意義、波及的な効果を確認することができる。その一方で、これまでの調査のような一定数の定量的データに基づく有効性を中心とした評価は、実施してない。そのためこれらは平均的な変化を客観的に記述したものではない。また観察された変化の要因は本WSに限らず、小野市国際交流協会の日本語教室や他の活動など、複数の要素が複雑に関与していると考えられる。起こった変化にWSが一要因として影響していることはエピソードの文脈から推測できるが、どの程度の影響であるかを測定することはMSCでは困難である。これらを念頭に置いたうえでお読みいただきたい。

3 MSCワークショップの内容報告

1 個人（市民&外国人）に起こった変化

変化の領域の1番目である「個人（市民&外国人）に起こった変化」に関しては、①もっと人とつながりたい、②友達になるきっかけづくり、③お互いの先入観がなくなる、というタイトル3つのエピソードが報告された。各エピソードの内容「重大な変化」と変化を「重大に思う理由」は　表2を参照のこと。

「エピソード①もっと人とつながりたい」について補足する。これまで市内の外国人は、他の外国人と知り合う機会がほとんどない。例えば小野市に900人弱いる外国人はほとんどが技能実習生のため、同じ国、同じコミュニティの中の人とだけ交流する傾向がある。それがWSをきっかけにお互いに壁を超えて知り合いになり、連絡先を交換し、仲良くなった事例であり、プログラム目標の一つである外国人同士の交流を促進することが、具体的・実際的に発現したことを示している。「エピソード②友達になるきっかけづくり」は①でできた関係が発展し、WSが終了したあとも外国人同士の良好な関係が継続している事実を表している。また、この関係は外国人同士だけでなく、SNS等を通して、参加者と講師などWSに関わった日本人と外国人との間の交流が芽生えたことも語っている。また小野市国際交流協会は、外国人の状況や悩みを熟知しているため、例えば「引きこもっている中国人主婦をWSの場所で世話好きな方に紹介する」事例があったなど、小野市国際交流協会の果たす役割の重要性も確認された。「エピソード③お互いの先入観がなくなる」では、WSを通じて、日本人と外国人がそれまでもっていた先入観がなくなった事例である。日

表2　個人（市民&外国人）に起こった重大な変化と重大に思う理由

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① もっと人と つながりたい	今までは（外国人は）職場⇔自宅⇔スーパーがほとんどの行動範囲でしたが、ワークショップで会った他国の外国人と積極的に友達になり、連絡先を交換していました。ワークショップが終了した後にも写真を撮り合ったり、話をしていました。	同じ仲間、同じ国の人、同じコミュニティの中で生活している彼らですが、ワークショップで一緒に笑い合い楽しい時間を過ごしたことで世界や視野が広がり、心が豊かになったと感じるからです。
② 友達になる きっかけづくり	外国人同士がWSを通じて友人になり、一緒に出掛けたりして写真をSNSなどにアップしている。 外国人・日本人ともに積極的にSNSで友達申請（参加者と講師など）をして繋がり交流が生まれた。	小野市国際交流協会の方は、外国人の方たちをうまく引き出して兵庫県立ピッコロ劇団と交流させた。
③ お互いの 先入観が なくなる	【日本人】 外国人と触れ合うことで、新たに先入観なしにお互いを知ることができた。 参加した日本人の子がWSに参加したことによって、外国人に話しかけることができた。 【外国人】 日本に住んでいても日本語で話す機会が少ない。WSは開放的な場所で楽しく日本人と話すことができ嬉しかった。	【日本人】 外国人と触れ合う機会がない、先入観（こわい、欧米人というイメージ）があったから。 外国人に積極的に話しかけられるようになった。（道に迷っている人など） 【外国人】 どんな風に思われていたか心配をしている声を聞くことがあったが、実際に楽しく交流したことで安心に繋がった。

本人は、外国人と触れ合う機会が少なく（あっても欧米人が中心）、欧米人でない外国人は「怖い」という先入観をもっていた。典型的な例がゴミ出しである。瓶ゴミの日ではない時、瓶類がゴミに出ていて、日本人は「ルールを知らない外国の人が出したのではないか」と思いがちであった。このような先入観を減らす上で、お互いを見直し、先入観を持たないようにしようという態度が育っている。また外国人の側も、それまで日本人から「怖い」と思われていると感じていたが、話をしてみると楽しく話すことができ、日本人に対して心を開く機会となったという。これらの結果からロジックモデルで予想された成果である、外国人参加者にとって「これまで小野市国際交流協会につながっていなかった外国人同士がつながる」「日本人や別の国の外国人など、職場以外にも話せる人ができる」といった成果が、日本人参加者にとっては「外国人と話すことの心理的なハードルが下がり、また外国人と触れ合いたいと思う」「外国人の友達ができる」といった良い変化が実際に起こったことが認められる。典型的な感想が、2年次参加の日本人高校生の「ベトナム人を見ることがあったが、日本語や体を使ってプログラムをすることで、距離が縮まった。話かけやすくなった」という声、「（WS後）ベトナムの人が道に迷っていたけど、日本語で話しかけて目的地まで連れていった。以前だったら声をかけなかったと思うけど、WSをやって日本語でも交流できそうだと思えた」という体験談や、外国人の感想で「日本人と話ができたことが一番楽しかった」というものがあった。

続いてこれら3つの「重大な変化」のエピソードの中から、一つの「最も重大な変化」を一つ選ぶ意見交換を行った。議論の結果、①もっと人とつながりたい、が最も重大な変化に選ばれた。選ばれた理由は「①の変化がWS全ての（根本的な）目的であり、様々な波及効果を生み出したから」であり、また「外国人の立場からの視点で見ると、それが一番嬉しかった」と考えられるからであった。

狭い世界に引きこもりがちな外国人に起こった象徴的な事例をあげる。「中学から３年間引きこもりで心身ともに病んで寝たきりでいたフィリピンの子どもがWSに参加することを、初年度の目標にした。初回は家に迎えに行ったことで参加したが、２回目は自ら自分の足でWSに参加するようになった」がある。「引きこもりの子が、主体的に参加してくれた」点が評価されたので、ここに記しておく。

2 小野市の地域社会に起こった変化

変化の領域の2番目である「小野市の地域社会に起こった変化」に関しては、「①職場でのコミュニケーション」「②企業と小野市国際交流協会との連携」「③地域との相互理解」の3つのエピソードが集まった（表3）。それぞれの詳細は表3を参照のこと。「①職場でのコミュニケーション」に関して象徴的なものとして言葉（方言）の問題があるようだ。小野市で使われる言葉は、関西弁の中でもなまりが強い「播州弁」と呼ばれるもので、外国人には伝わりにくい。外国人が働く職場でも、丁寧な言葉で話してもらえず意味が通じなくて傷ついてしまうことがあり、関係性がギスギスする背景があった。WSの結果、相互理解が進み、外国人も日本人とのつながりを感じて安心感を持てるという成果があった。「②企業と小野市国際交流協会との連携」に関しては、WSに日本人と外国人の両方に来てもらうために、小野市国際交流協会の理事は、市役所市民サービス課の課長と一緒に外国人を雇う会社を25社まわったという。実際に彼らが働く姿を見せてくれる企業もあったが、企業によって外国人に対する想い・知識・意識がまったく違うことがわかったという。結果として、小野市国際交流協会が企業のことを理解し、つながりができる機会となり、新しい学びを得る成果があった。職場で働く外国人の背景を小野市国際交流協会側が知ることで、その後は背景を想像しながら外国人の話を聞くことができるようになったという。外国人も、小野市国際交流協会職員が来たことで励まされた。同時に企業に小野市国際交流協会のことを理解してもらう契機になった。例えば、職場の上司も彼らが日本語教室で勉強していることを知らず、頑張りを認めてもらえる例があった。「③地域との相互理解」は再びゴミ問題に焦点があてられている。当初、地域のゴミ捨て場の掃除当番は、外国人は入らず日本人だけで行っていた。日本人が外国人に対して先入観があり「掃除当番などいい加減にやるだろう」と思っていたからだ。特に高齢者の多い地域では「言葉のわからない外国人はちょっとこわい」と抵抗感があり、働きかけていなかった。しかし実際は外国人もまじめな責任感があり、自分たちは掃除をしなくてもいいのだろうかと思っていた。WSに行政のコミュニティセンターの人権担当の方がおり、明るく日本語が上手な彼らを知ることにより、区長を通じて住民と外国人の地域交流会の場を設けた。その場を通じて普段からのお互いの思いや、ゴミ捨て場問題も話し合うことができた。結果として、その地域のゴミ掃除当番に外国人も加わることとなり、真面目に頑張る外国人の姿に、近所の人も彼らを見る目が変わってきたという。このようにWSが外国人と地域との相互理解、日本人と外国人の共生関係を作る契機となっていることがわかる。その後も嬉しいつながりとなるエピソードあった。コロナ禍の中、人権担当の方が、職員とともに手作りしたマスクを地域に住む外国人にもプレゼントした。受け取った一部の外国人女性（インドネシア人）が、「私たちも作りたい！」と、数人の外国人仲間とともに約100枚のマスクを手作りし、近所に住むお年寄りにプレゼントをした。このゴミ捨て場掃除のエピソードと手作りマスクプレゼントの事例は、外国人と住民との交流をテーマにした短編動画として作成された。これは内外で広く評価され、人権啓発ビデオで最優秀賞に選ばれた[1]。

地域社会における3つの変化の中で、どれが一番重大と思うか議論した結果、③の「地域との相互理解」（ゴミ捨て場掃除問題の解決）が選ばれた。選んだ理由は、「外国人も職場を離れたら一市民、地域はあらゆる人にとって安心安全で暮らせる居場所＝生活の基盤だから、地域に根ざした課題の解決は重要である」ということになった。実際に外国人も浴衣を着て地元のお祭りや行事に参加するようになってきている。（その浴衣も地域の人から集められた物であった。）外国人がご近所さん（小野市民）としてつきあえるようになってきたことが評価された。

外国人との共生
短編動画で訴え
ごみ清掃など通じ交流深める姿描く
実話題材に脚本、撮影、出演も

1　動画のタイトルは「かんしん」、テーマは「外国人との共生」、東播磨・北播磨地区視聴覚教材コンクールで最優秀賞に選ばれた。
神戸新聞（2020/11/25）掲載より

表3　小野市の地域社会に起こった変化

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① 職場での コミュニケーション	企業に直接働きかけをして、職場で共に働く日本人と参加してもらいました。プライベートまで関わることがあまりないために、最初はお互いに緊張していましたが、ワークショップの中で普段見ることのない姿や笑顔を見ることが出来て嬉しかった、安心したという声がありました。	ワークショップ後、お互いに相手への想いが変化し、より柔軟にコミュニケーションが取れ、必ず仕事の生産性向上につながっていくと思うからです。
② 企業と 小野市国際交流協会との 連携	WSの案内で各企業をまわることによって、現場の状況や職場の日本人が外国人に求めることなど理解することができた。	小野市国際交流協会の方が職場の現場を知ることができたということと同時に、働いている現場を見に来てくれて外国人が励まされる効果があった。
③ 地域との 相互理解	ごみステーションの掃除当番表に当初は外国人は当番に入れず日本人のみで行っていた。WSに視察に来た人権担当が参加している外国人をみて先入観がなくなり、働きかけもあって地域交流会に外国人が参加することができるようになった。 結果、掃除当番表に参加することができ、地域の方々と交流が生まれた。	外国人に対して先入観があって、掃除当番などいい加減にやるだろうと思っていたが、外国人にも真面目にやる気があった。

3 小野市の行政に起こった変化

変化の領域の3番目である「小野市の行政に起こった変化」では、「①外国人も同じ市民として地域につなげる」「②議会で外国人について議論」「③困ったときの相談窓口」の3つのエピソードが集まった（表4）。「①外国人も同じ市民として地域につなげる」に出てくるコミュニテイセンターは、教育委員会の管轄で行政の一環である。小野市国際交流協会からコミュニティセンターに働きかけをして、人権担当の方に見学してもらった。行政側は外国人に会うチャンスがなく、実際の声を聞くことがなかったが、WS後にある地域では、コミュニティーセンターを拠点として、マスクづくり、ゴミ当番問題の解決、交流会、イベントへの参加と、お互いに相談出来る関係へと変化しているという。「②議会で外国人について議論」に関しては、WSを見に来た市議会議員が、市議会で外国人について答弁し、市長に外国人へのサポートのあり方などを質問した。WSを見て感じるところがあったのだと考えられる。市長の見解は小野市国際交流協会とは異なる面もあったが、議会でとりあげられたという事実が重要と考えられる。後日、市長の意見も、外国人への取り組み方を考えようと変わってきたという。「③困ったときの相談窓口」は小野市職員らの外国人担当者が集まる場ができた話である。外国人と関わる市職員も、管理職を含めほとんど外国人とあったことがないという実態があった。従って窓口に外国人がきたら、あたふたとタブレット（日本語翻訳機械）に頼ってしまう。または難しい日本語を使ってしまう問題があった。そこで、市民サービス課の呼びかけで、外国人が関わる全職員の会議「外国人対応状況庁内連絡会議」が令和2年8月に開催された[2]。目的は課同士の情報共有である。そこに小野市国際交流協会も参加した。これまでどんな相談があったか情報交流を行った結果、協会としても外国人の抱える様々な課題に対して、どこに紹介すれば良いかが明確になった。つまり困った時の相談窓口がどこにあるのかを、外国人、小野市職員がお互いにわかるようになった。またやさしい日本語を使えば外国人に伝わることを共有できた（×土足厳禁→〇靴を脱いでください）。担当者同士がお互いに顔見知りになれたのも良かったという。その後小野市以外近隣にも声をかけ、多文化共生に関わる担当者の合同会議も行われた。また防災センター担当の方がいたが、彼らも外国人と会ったことがなく困っているところだった、会議をきっかけに避難所のことなど話が展開し、その後、災害時に外国人にどのように対応したらよいか、小野市国際交流協会と小野市消防本部による防災訓練（緊急搬送訓練）が12月に実施され、ブラジルやベトナム、韓国など4カ国住民が参加した。また防災センターがFacebookを通じて発信する防災情報などを、小野市国際交流協会や日本語教室のFacebookと連携するまでつながった。防災センターの情報が、市内近隣に在住する外国人に少しでも広く届けられるにはどうしたらいいのかと模索中である。

23 まつり・ボランティア　2020年(令和2年)1月23日　木曜日

北播

けが、病気…外国人救急搬送訓練

意思疎通の方法を模索

小野

神戸新聞（2020/1/23）掲載より

2　その前段階として令和元年 8 月に担当窓口職員を対象に「ベトナム人をはじめとする英語を母語としない外国人の転入増加対策会議」が開催されている。開催のきっかけは、小野市国際交流協会の企業まわりであった。

表4　小野市の行政に起こった変化

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① 外国人も 同じ市民として 地域につなげる	市内のコミュニティセンターにも直接働きかけをして、人権担当の方にも見学してもらいました。ワークショップの中での外国人の普段の様子や彼らの笑顔を見てもらい、地域につなげるためでした。行政の人たちも、プライベートで彼らに会うチャンスがなく、実際の声を聞くことが出来ませんでしたが、ワークショップ後、ある地域では、コミュニティーセンターを拠点として、マスクづくり、ゴミ当番問題の解決、交流会、イベントへの参加というように何かあれば、お互いに相談出来る関係へとなってきています。	地域に住む外国人の存在を同じ地域の人たちに理解してもらうことは大切だと考えます。もしもの時にお互いに助け合える関係であってほしいからです。
② 議会で外国人について 議論	視察に来ていた市議会議員が、その後の議会で外国人へのサポートについて市長に質問していた。	議会で外国人のことを取り上げていたから。市長の意識も変わった（らしい）。
③ 困ったときの 相談窓口	企業まわりを一緒にした市の課長の呼びかけで、小野市の外国人担当者が集まる場をつくった。 特に防災センターでの備えについて話しが進み訓練も行った。防災連絡が各国の言語で外国人にも伝わるようになった。	それまでどこに相談してよいかわからなかったが、外国人の困ったときの相談窓口がお互いどこにあるかが理解できた。

この領域に関して最も重大な変化を選択する議論を行った。その結果、「③困ったときの相談窓口」になった。選んだ理由は、特に防災センターの情報は「外国人にとっても、命や生きていくことに必要な重要なもの」であり、それを彼らにつなげることができたことが重要だと考えられるからである。

その他の波及効果として、小野市のWSの評判を聞いて近隣の市から同様なWS実施の依頼が増えていることがある。実際に令和２年度は加東市での実施も計画された（新型コロナウイルス感染拡大により中止）。尼崎市の担当者も来て「うちでもやりたい」と連絡がきているそうだ。新型コロナウィルス関係ですぐに拡大はむずかしいかもしれないが、長い目で見た場合、この種のWSが他の自治体にひろがっていく可能性がある。

4 分析と考察

1 プログラム目的達成の象徴的で多様な質的変化が報告された。

MSC手法を通じて、プログラムの影響によって発現した定量化されない変化、特に人間の意識・行動の変容の詳細をいきいきと象徴的に表している変化を把握・分析することができた。「にほんごであそぼう」WSにおいて、個人（小野市民、外国人）、地域社会、行政にさまざまな影響を与えたことを把握することができた。

- 地域における外国人同士の相互理解においては「職場⇔自宅⇔スーパーがほとんどの行動範囲でしたが、ワークショップで会った他国の外国人と積極的に友達になり、連絡先を交換していました。」で述べられるように、働いている職場や普段の生活圏を超えて、外国人同士の出会い・交流の機会を提供した。「外国人同士がWSを通じて友人になり、一緒に出掛けたりして写真をSNSなどにアップしている」成果が発現していることなどがわかった。
- 外国人と日本人の相互理解においては、日本人・外国人ともに、新たに先入観なしにお互いを知ることができた。例えば、参加した日本人の子どもがWSに参加したことによって、外国人に話しかけることができた。外国人にとっても「日本に住んでいても話す機会が少ない。WSは開放的な場所で楽しく日本人と話すことができ楽しかった」という感想があった。外国人・日本人ともにSNSの友達申請（参加者と講師など）で繋がり交流が生まれた。また企業にはたらきかけて職場の日本人・外国人双方にWSに参加してもらうことによって、「（通常は）プライベートまで関わることがあまりないために、最初はお互いに緊張していましたが、WSの中で普段見ることのない姿や笑顔を見ることが出来て嬉しかった」という感想があった。フィリピンの「引きこもりの子が、主体的にWS参加してくれた」のは、WSが安心・安全な場として機能していたからであろう。
- コミュニティづくりを促進する、に関しては、「ごみステーションの掃除当番表に外国人を入れず日本人のみで行っていたが、WSを通じた働きかけもあって外国人も当番に参加するようになった」「日本人は外国人を『怖い』、『真面目にやらないだろう』などと先入観をもっていたが、実は外国人も日本人からどう思われているか気にしており、地域に貢献しようという責任感がある」ことが、WSにおける交流の中で相互理解が深まり先入観を払拭できた。このような事例を通じて、外国人の小野市の地域社会への参加がはじまった。またコミュニティセンターなど行政にも働きかけをして、人権担当の方にWSを見学してもらい、コミュニティーセンターを拠点として、マスクづくり、ゴミ当番問題の解決、交流会、イベント参加などお互いに相談出来る関係」が構築されつつあることがわかった。そのような流れで「WSを視察した市議会議員が、市議会で外国人支援について質問し、市長も関心を持ち始めた」ことなどの変化が観察されている。さらには「企業まわりを一緒にした市の課長の呼びかけで、小野市役所内で外国人が多く利用する課の担当者が集まる場をつくった」「いざという時はどうしたら良いのか話しが進み防災センターで訓練も行った。防災連絡が各国の言語または外国人にも伝わるような言葉で情報提供できるツールができた」など地域社会だけでなく、行政にも影響を与えている。今後は日本の生活になじめない外国人の中でも、特にその子どもや家族への参加を促し、地域社会へつなげ、日本人と外国人がいきいきと共生する地域社会の実現をめざす、と言うゴールに向けて着実に成果をあげていることがわかった。

2 プログラム目標にない波及的変化につながっている。

プログラム目標に記述されていなかった効果がいくつか確認された。1つ目は小野市国際交流協会の役割の重要性である。小野市国際交流協会の理事がWSの案内で各企業をまわることによって、現場の状況や職場の日本人が外国人に求めることなど理解することができた。同時に働いている外国人も安心感を得ることができた。2つ目は、他の自治体への波及効果が挙げられる。小野市のWSの評判を聞いて近隣の市からWSの依頼が増えていることがある。実際に令和２年度は加東市での実施も計画された（新型コロナウイルス感染拡大により中止）。

3 今後の課題

今回のMSC手法による評価調査は、コロナ禍の状況下で、少人数で一度のみの実施となった。そのため。広く利害関係者からデータ収集を行ったわけではない。最初に述べたように、定量的な調査は実施が不可能であった。感染拡大が収束した暁には、定量的なロジックモデル評価などと、MSCのような参加型・質的評価手法を併用することで、より客観的でバランスの取れた評価ができることが期待できる。

本稿を締めくくりに、評価にご協力いただいた小野市国際交流協会とピッコロ劇団の皆様へ謝意を申し上げたい。

以上

不破高校
演劇ワークショップ
MSC 評価報告

1 背景・目的・プログラム概要

岐阜県立不破高等学校（以下、不破高校）での演劇ワークショップは、文学座が平成26年度より継続的に実施している。同プログラムは岐阜県立東濃高校でも実施されており、東濃高校でのプログラムは日本劇団協議会がまとめた文化庁の平成28年度、29年度の委託事業報告書により、有効性がみとめられている。

1 背景

不破高校が演劇ワークショップを実施した背景には、以下の3つの背景がある。

①学校の定員割れ

不破高校は以前様々な問題や困難を抱えた生徒が多く通学し、不破高校に自分の子どもを通わせることに抵抗を覚える保護者もいた。こうした課題の原因の一つとして生徒のコミュニケーション力の不足があげられる。学校や近隣住民と適切なコミュニケーションをとりながら学校―生徒―地域という関係性を構築する必要があると考えられている。

②中退者数の多さ

不破高校は中学校時代から不登校だった生徒、特に目的もなく高校に進学してくる生徒に中退者数が多いと考えている。また、学校が生徒にとっての居場所になりきれていないことも懸念している。これも生徒同士のコミュニケーション不足がその原因である可能性が考えられる。

③基礎学力の不足

不破高校は生徒の基礎学力が不足していると考えており、この底上げも重要視している。基礎学力の向上のためにはクラスメイトや教員への質問、意見の発表等様々な側面でコミュニケーション能力の開発が重要と認識している。

2 令和2年度のプログラム目的

- 多様な生徒同士の、他人と自分自身を認識する力を育成する。
- ワークショップにおいて、コミュニケーションの基本である他者理解能力を高める。
- 普段の学校生活の中では見出されにくい生徒の長所を生徒同士が発見することにより、自己肯定感を育む。

【対象】1年生全員

【講師】文学座の演出家、俳優の3名

【内容】

第1回：導入としてグループの仲間を意識し、和んだ雰囲気の形成のため、シアターゲームなどを織り交ぜて、体を動かしながら、他者を意識する。

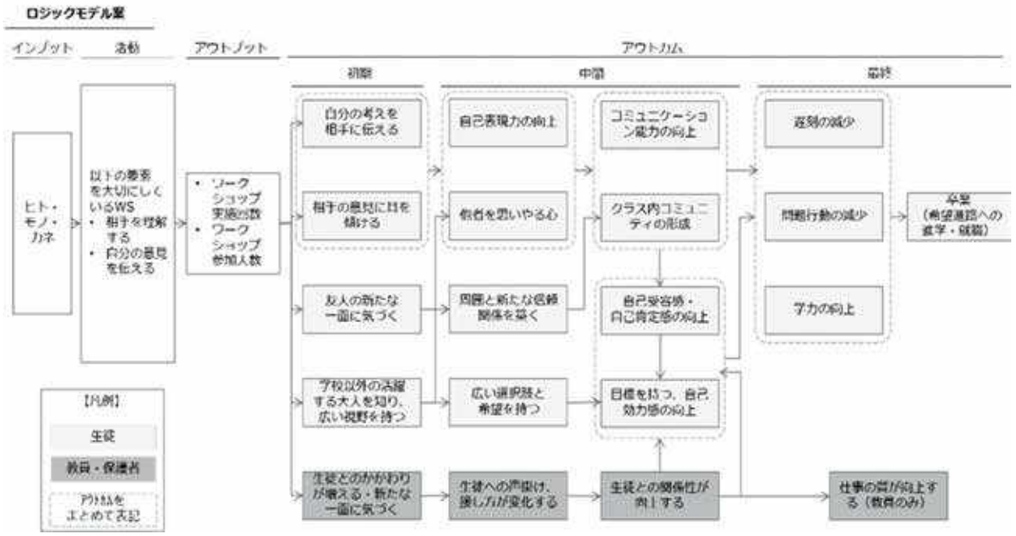
第2回：第1回に引き続き、シアターゲームを中心に、他者の動き、心情に集中するとともに、自分の気持ちを表現する。

第3回：2回のワークショップを受け、言葉と身体表現などを使い、他者との関係性を構築する。

3 演劇ワークショップのロジックモデルと期待される成果

不破高校演劇ワークショップのロジックモデル（平成30年度報告書より）

対象事業	不破高校の1年生全体に向けた演劇表現ワークショップ
関係者	①不破高校1年生全体 ②教員・保護者、③劇団の俳優（文学座）
目的	生徒のコミュニケーション能力向上、学校内コミュニティの形成（居場所づくり）、入学者の増加



＜初期アウトカム（抜粋）＞

- 自分の考えを相手に伝える
- 相手の意見に耳を傾ける
- 友人の新たな一面に気づく

＜中間アウトカム（抜粋）＞

- 自己表現力の向上
- コミュニケーション力の向上
- 自己受容感・自己肯定感の向上
- 目標を持つ、自己効力感の向上

＜最終アウトカム＞

- 遅刻の減少
- 問題行動の減少
- 学力の向上

＜教員に対して＞

- 生徒の声かけ・接し方が変化する
- 生徒との関係性が向上する
- 仕事の質が向上する。

4 これまで確認されてきた成果

平成30年度報告書によると、アンケート調査等による調査員の五段階評価による本WS総括のレーティングは以下表のようになり、高い有効性が示されている（表1）。

表1　平成30年度WSの総括評価結果

	総括の視点	総括成果	平均点（5段階）
1	調査分析の妥当性（ニーズ）	十分に可能性がある	A
2	内容の妥当性（セオリー）	十分に可能性がある	A
3	実施の十分性・適切性（プロセス）	十分に可能性がある	A
4	成果・効果（アウトカム）	ある程度可能性がある	B
5	持続可能性	十分に可能性がある	A

2 令和2年度における不破高校の状況と対応

1 新型コロナウィルス感染拡大とWSの中止、代替案の模索

令和2年度は上記のようにWS実施計画が立案され、その効果を検証する調査も並行して実施される予定であった。しかしながら、世界的に発生した新型コロナウイルス感染拡大の影響により3回実施される予定のWSのうち最後の1回が中止されるという事態に陥った。また、当初予定していた調査者によるWSの観察、参加者への定量的アンケートやインタビューといったデータ収集・分析の実施が不可能となった。このような理由により調査の視点を変え、量的調査・有効性を中心としたものではなく、WS開始以降これまでにその影響で起こった関係者の様々な変化について、質的（定性的）データ収集及び分析を、不破高校教員への質問および調査と文学座座員に対するオンライン・ミーティングを通じて実施することに変更した。手法には、欧米の国際協力NGOが多用しているMSC（モスト・シグニフィカント・チェンジ）手法を採用した。これは活動現場で起こった「重大な変化」を変化の起こった分野（領域）ごとにエピソードの形で複数収集し、それらの中から「最も重大な変化」を関係者の参加で一つ選択する過程を通じて、質的変化を把握・分析するものである。人間の意識・行動変容など定量化できない質的変化をいきいきと把握したり、ロジックモデルで想定できなかった波及的な変化を把握したりできる特徴がある。また変化の背景にある促進・阻害要因を分析し、活動を改善させる教訓を学習する利点があるといわれている。詳しくは「参加型・質的評価手法MSCの活用」を参照されたい。

2 MSC手法による評価の目的

評価の目的は、「これまでの演劇ワークショップの影響で、不破高校の生徒の、①自己表現・自己肯定感の向上に関して起こった変化、②クラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起こった変化、③問題行動に関して気がついた変化、これら質的な変化の詳細や波及的な効果を把握するとともに、変化の背景にある要因を分析し、今後の活動に活かしていく」とした。

3 データ収集及びオンライン・ミーティング開催の経緯

不破高校の教員13名に依頼して質問用紙を用いて、生徒の変化についての下記の情報を収集した。時間の範囲を「演劇ワークショップがはじまってから今まで」とし、変化の領域を下記のように3種類設定し「重大な変化」をそれぞれ3編ずつ収集した。

- 生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起こった変化
- 生徒とクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起こった変化
- 生徒の問題行動に関して気がついた変化

1/31にオンライン（Zoom）によるミーティングを行った。集まったエピソードの中から、文学座の西川氏とアシスタント高柳氏、横山氏の参加で、調査者の進行で、上記3名の参加で各領域から「最も重大な変化」のエピソードを1編選択する作業を行った。

4 本調査の長所とその限界

MSC手法によって収集・分析された質的な「重大な変化」は、事実であり、それらを理解することで活動の成果の質的な詳細や、社会に与える意義、波及的な効果を確認することができる。その一方で、これまでの調査のような一定数の定量的データに基づく有効性を中心とした評価は、実施してない。そのためこれらは平均的な変化を客観的に記述したものではない。観察された変化の要因は本WSに限らず、不破高校の他の授業や行事の影響など、複数の要素が複雑に関与していると考えられる。起こった変化にWSが一要因として影響していることはエピソードの文脈から推測できるが、どの程度の影響であるかを測定することはMSCでは困難である。これらを念頭に置いたうえでお読みいただきたい。

3 MSCワークショップの内容報告

1 生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起こった変化

この領域に関しては、９つの変化のエピソードが集まった（表２）。母数が多いので「最も重大な変化」を2編選ぶことにした。それぞれのエピソードにコメントをしながら選んだ。

「③伝えなければ思っていないのと同じ」は「重大に思う理由」がないため、説得力に不足しているということで省いた。「①３年生の就職面談指導」は「1年時にやったことが、３年で開花したことが面白い。しかし3年間で生徒はいろいろな経験をするので、WSがどの程度影響したかは測りづらい」という意見が出た。「⑤ワークショップがきっかけに」は教師側の視点なので、優先度を下げた。また「④仲間に対しての思いやり」と「⑧観客と演者」は「やる側とやられる側があり、やる側になることで集中しなくてはならない」点で共通点があるとされた。「②友達とのかかわり」と「⑥授業参加」も、積極的なコニュニケーション力が育まれた点で似ている。「⑨褒めることで生徒のやる気が向上する」は「ちょっとでも進歩があるとWSでは褒めるようにしている。自己肯定感がなかったり、ずっと褒められることがなかったりした生徒が多いので、⑨は重要だと思う」などの意見がだされた。最終的に「②友達とのかかわり」「⑨褒めることで生徒のやる気が向上する」を「最も重大な変化」2編に選んだ。選択した理由は、②に関しては、一般論ではなく、具体的に生徒Aに関するファクトが述べられていることで、「⑦隔たりの無いクラス」など他の類似変化と共通・代表していると思われるからである。⑨に関しては、他校を含め生徒には自己肯定感が低い共通点があるが、適切に褒めることが、自己肯定感を向上させるために有効であることが如実に語られており、それがまたWSの目的でもあると考えた。「褒めるっていうのはその人間の存在を認めるということ。自己肯定感がないというのは存在として生まれてきてよかったのかというところまでの子がいる。家族や地域の中で、もがき苦しんで、高校に入ってくるが、居場所がなかなか見つからない。仲間とのつながりがとりにくいなどの問題が起こり登校しなくなる子が多い。ワークショップに参加し、仲間が出来、居場所ができる。また、褒められたことが、人間存在として認められたと僕らが思う以上に彼らは思っている」と西川氏のコメントがあった。

表２　生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起こった変化は

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① **３年生の就職面接指導**	１年時はなかなか話すことが苦手だった生徒が、３年時の面接指導の中でしっかりした口調で話すことができるようになった。	演劇WSがその要因の一つになっていると思うから。
② **友達とのかかわり**	積極的な自己表現が苦手な生徒Ａが，友達に話しかけることができた。	生徒Ａは，もともと積極的な自己表現が苦手だった。演劇ワークショップでのかかわりを経て、友達に話しかけようとする姿が見られた。
③ **伝えなければ、思っていないのと同じ**	伝えることの大切さを学んだ。伝え方も様々であり、もじもじしながらも何とか相手に伝えようとする姿が見受けられるようになった。	
④ **仲間に対しての思いやり**	仲間に対しての思いやり譲り合いを垣間見ることができた。	自己にゆとりをもてないと他者に対して優しくすることができないため。
⑤ **ワークショップがきっかけに**	コロナの影響で始業が遅れ、仲を深める時間も短く、きっかけがなかった。その中で、ワークショップがお互いに知るいいきっかけとなった。	クラス経営に大きくプラスに影響したため。
⑥ **授業参加?**	最初のころは体育の授業でも参加せずに参加してもほとんど何もしなかった生徒が仲間とコミュニケーションをとり授業に参加するようになった。	授業に意欲的でなかったのに演劇WSでコミュニケーションの取り方を学んだり仲間と打ち解けたりしたことで今は友達とコミュニケーションをとって授業に参加しているから。
⑦ **隔たりの無いクラス**	授業中今まで話し合ってなかった生徒同士で関わり合っている気がする。	一年生でまだ関わりが薄いとおもうので関わり合っていることはとても素晴らしいことだと思うから。
⑧ **観客と演者**	生徒は今まで観客であったが、自らが演者となったことで演者の考えを想像できるようになった。	授業をしていると受け身の生徒をよく見かける。 ちょうど演劇に足を運ぶ観客のように。 だが、演劇ワークショップ後のある生徒は自ら進んで発表を行っていた。 演者である自分を想像で来たため、その発表は実現できたのだと感じている。
⑨ **褒めることで生徒のやる気が向上する**	自己肯定感の低い生徒が多い本校において、少しのことでも褒めることを意識すると、学習においても生活においても、意欲的に取り組んでくれるようになる。	今までに褒められる経験が少ない生徒が多いため、有効であると思ったから。

表３　生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起こった変化

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① **日々の学校生活の中で生徒の様子に成長が見られたとき**	１年時は話すことに奥手だった生徒が、２年３年になるにつれ、生徒自らこちらに話しかけてくれたり笑顔で話ができるようになった。	
② **無題**	何年か前に、雪降りで近隣のおばあさんが転んだところを、生徒が助けたことがありました。	困っている人を見かけたら、すぐにに声をかけられる勇気が身に付いたのだと思います。
③ **日常での挨拶交流**	朝や帰りの何気ない挨拶を生徒間や生徒と教員間、生徒と地域の方々の間でできるようになった。	挨拶がコミュニケーションの最初の入り口だと考えるから。
④ **与えられたテーマを表情と体で表現する**	クラスメイトにいつもは見せていない一面を見せた。	クラスメイトがある生徒に関して「あいつはあんなおもしろいことできるんだ」と感じ、コミュニケーションのきっかけとなる。
⑤ **教員とともに体験する**	教員自身もワークショップに参加させていただいため、教員もクラスの一員である認識が生まれた。	教員、生徒ともにクラスを作っている意識が生まれたため。
⑥ **形から入るタイプ**	ワークショップで名前をよく呼び合ったため名前を覚えたり、言動や行動を覚えてクラスとしてできあがった要に感じる。	クラスとしての絆につながったから。
⑦ **楽しみ方の変化**	真剣な場面で、真剣に取り組むことが本当の「楽しい」ことだと気づいた様子。	ある生徒は真剣な場面で、ふざけて楽しむことが多かった。 子供ならではだと思うが、それではあまりに独りよがりだ。 決められたルールを理解し、その中で真剣に取り組むことでその生徒は普段見せない笑顔が出ていた。本当の「楽しい」を知るきっかけになったのだろう。
⑧ **通常授業以外の行事で生徒同士の仲がより深まる**	通常授業だけでは見られないコミュニケーションは、WSを始めとし、行事の中で育まれることが多い。	非日常の中で生徒や教員、地域の方との普段とは異なったコミュニケーションが図られるから。

2 生徒のクラス・先生・地域との コミュニケーションに関して起こった変化

この領域に関する変化のエピソードを表3にまとめたので参照されたい。エピソード「①日々の学校生活の中で生徒の様子に成長が見られたとき」に関しては1年時にWSに参加した生徒の2〜3年時においての変化なので「WS以外に成長の要因も考えられ、直接の影響とはわからない」と解釈された。「②無題」は「美談ではあるが、これもWSが要因とは判断できない」となった。「④与えられたテーマを表情と体で表現する」は「他者の意外な一面を発見できた」「自分の本音やダメなところをさらけ出すことで、周りが評価してくれる」「生徒が教員の新たな一面を発見できる」ことなどが重要とされた。同様に、「⑤教員とともに体験する」では「教員が参加することで、生徒との距離が短くなった」「教員・生徒ともにクラスを作っている意識が生まれた」点が評価された。「⑥形から入るタイプ」は「WS効果としてはわかりやすいが、終了後しばらくたつうちゼロに戻っているときがある」の重要度は高くないかもしれない。「⑦楽しみ方の変化」は「本当に『楽しい』とは真剣に取り組んでいることで、ふざけることとは違う」ことを生徒が理解したことが重要とされた。「⑧通常授業以外の行事で生徒同士の仲がより深まる」では「生徒や教員にとどまらず、地域の方までコミュニケーションを図れるというのは過大評価かもしれない」との意見が出た。（P39 表3参照）

最も重大な変化は、「⑦楽しみ方の変化」とされた。その理由は「"楽しい"と"ふざける"は違う、そのことにWSを通じて気づくことができたから。本当に楽しいというのは一所懸命（真剣に取り組む）やって楽しくなる」。2番目に重大な変化は「④与えられたテーマを体で表現する」であった。その理由は「あいつ、あんな面白いことできるんだ、と他者の意外な面を発見できること。それは転じて自己の発見にもつながり、自己肯定感につながっていく」という見解に基づくものであった。

表4　生徒の問題行動に関して気がついた変化

タイトル	重大な変化	重大に思う理由
① 暴力的な生徒が少なくなった	演劇WSがない頃は、自分の気持ちや考えをうまく表現できない生徒が、苛立って他人に暴力行為をすることがあったが、演劇WSが始まってからは若干少なくなってきた感じがする。	
② ストレス軽減で問題行動が減る	ワークショップによって、ストレスとの向き合い方を学んだり、そもそもワークショップ自体が体を動かすことでストレス発散できたりして、問題行動のリスクを減らせたと思う。	問題行動を減らすことは生徒にとってとても大切だと思うから。
③ 曙の土俵入り	生徒が多少スリリングなじゃれあいをするようになった気がする。	良くも悪くもアクティブになったと思うから。
④ 正しい自己主張	タイミングを計って自己主張できるようになっていく。	誰しも自分が一番かわいい。子供ならなおさらだ。その為、我も我もと自己主張する時がある。 だが、そればかりではいけない。集団である以上配慮は必要だ。 今なら自己主張してもいいタイミングだ、とそれに気づくことができると対人関係は良好になりやすい。 演劇ワークショップでは決められた順番に演技をしていく。その中で自己主張ができるのだ。 生徒たちはこの活動を生かし、正しい自己主張ができるようになっていくだろうと強く感じている。
⑤ 保護者の方と深く話し合い自己を見つめる期間になる	学校内の反省のみでなく、保護者の方との関わりの中でより深く自己を見つめ直し、反省につながる。	普段多忙な保護者の方と改めて深く話すいい機会となると考えるから。

3 生徒の問題行動に関して気がついた変化

この領域に関する5編のエピソードは表4をご参照いただきたい。

エピソード「①暴力的な生徒が少なくなってきた」に関して、「変化は事実だが『重大に思う理由』を書いて欲しい」との意見があった。「③曙の土俵入り」は「問題行動」という範囲から多少異なっているので、候補から省くことにした。「④正しい自己主張は」は「タイミングを計って自己主張というのは、空気を読んで、という経験をしないと使えないと思うので興味深い」という意見が出された。「②ストレス軽減で問題行動が減る」に対しては「自分を認めてもらえないというストレスを問題行動で発散する。僕らのWSは最初にとにかく体を動かすかプログラムを入れる。すると何かが変わる。体を動かすと心も変わる。それが問題行動の抑制につながっていく」「WSで体を動かした後に、西川さんが理由づけを話すので、そこで生徒はストレスとの向き合い方を学習していると思う」などの理由で高く評価された。「⑤保護者の方と深く話し合い」自己を見つめる期間になる、は内容が「理解しずらい」との反応があったが「学校と保護者では軋轢がある場合がある。教育環境が悪いから勉強ができず、就職も不利になるが、保護者が十分に理解していないことがある。そのことを述べている」と推察されたが、問題行動とは関連が深くないとも思われるため候補から省いた。（P40 表4参照）

これら5編のエピソードから「最も重大な変化」を全員一致で「②ストレス軽減で問題行動が減る」を選択した。選んだ理由は、「心と体は一緒だとWSによって気づき、体を動かすことによってストレスが軽減され、自己肯定感が上がり、問題行動のリスクが減る」と考えられ、それがWSの大きな成果とみとめられるからである。

4 分析と考察

1 プログラム目的達成の象徴的で多様な質的変化が報告された。

MSC手法によって、定量的手法で把握が難しい質的な変化が、生徒のことをもっともよく知る教師の観察によって、多数収集され、その中からWS実施者である文学座メンバーが「最も重大な変化」を選択する中で、プログラムの持つ価値が具体的にどのように体現されているか確認することができた。プログラム目標に準じて考察したい。このプログラムには以下の3つの目標があった。

- 多様な生徒同士の、他人と自分自身を認識する力を育成する。
- ワークショップにおいて、コミュニケーションの基本である他者理解能力を高める。
- 普段の学校生活の中では見出されにくい生徒の長所を生徒同士が発見することにより、自己肯定感を育む。

WSを通じて、（1）⑧「生徒は今まで観客であったが、自らが演者となったことで演者の考えを想像できるようになった。演劇ワークショップ後のある生徒は自ら進んで発表を行」えるように初期アウトカムにある自己表現・コミュニケーション能力を身につけていった。そして（1）⑨の「自己肯定感の低い生徒が多い本校において、少しのことでも褒めることを意識すると、学習においても生活においても、意欲的に取り組んでくれるようになる」のように、褒められることで生徒が自分の長所を発見できた。また領域（2）④にあるように「クラスメイトにいつもは見せていない一面を見せた、クラスメイトがある生徒に関して「あいつはあんなおもしろいことできるんだ」と感じ、他の生徒の長所を発見することができた。このようにWSをきっかけに（1）⑦「授業中今まで話し合ってなかった生徒同士で関わり合っている」、（1）⑥「ワークショップで名前をよく呼び合ったため名前を覚えたり、言動や行動を覚えてクラスとしてできあがった」など、生徒の相互理解とコミュニケーションが育まれた。これらの結果、生徒の自己肯定感が向上し、（1）②のように「積極的な自己表現が苦手な生徒Aが，友達に話しかけることができた」というように、コミュニケーション力の向上につながったと推察できる。また（2）⑦にあるように、「ふざけるのではなく、真剣な場面で、真剣に取り組むことが本当の「楽しい」ことだと気づいたこと」も、生徒の内省の深化と成長を促し自己肯定感の向上に寄与したと考えられる。またWSで身体を動かすことが（3）②にある「ワークショップによって、ストレスとの向き合い方を学んだり、そもそもワークショップ自体が体を動かすことでストレス発散できたりして、問題行動のリスクを減らせた」という、最終アウトカムの実現に貢献する効果があった。

2 生徒のみならず関係者の多様な変化や波及効果につながっている。

受益者である生徒の視点ではないが、教員の視点から（1）④「コロナの影響で始業が遅れ、仲を深める時間も短く、きっかけがなかった。その中で、ワークショップがお互いに知るよいきっかけとなった。クラス経営に大きくプラスに影響した」というメリットや、（2）⑤のように「教員自身もワークショップに参加させていただいたため、教員もクラスの一員である認識が生まれた。教員、生徒ともにクラスを作っている意識が生まれたため」とWSが教師と生徒の間の隔たりをなくしていった波及効果がみとめられる。

3 文学座による感想

上記の選択プロセスに参加した文学座メンバーにより、以下の感想があった。

- 通常アンケート結果を膨大な量をいただくが、今回はポイントを具体的に振り返り、ワークショップの意義を改めて実感できた。有意義だった。
- ワークショップの効果が不安だったが、伝わっていることが文字で見られてよかった。
- ワークショップをやりながら、こどもの変化まで読み取るのは難しいが、日常的に接している先生からまとめていただき、わかりやすかった。
- はたから見ると遊んでいるだけじゃないかと先生に思われている不安もあったが、ゲームを通して西川氏から説明もあり、どう褒めるかの言葉の選びかたも注意してやっている中で、先生方も主旨を理解し、感想いただけたことが実感として感じられて嬉しい。
- エビデンスは数値変化が求められることが多い。プラス、このように何が起こってどういう変化が現れたかを言葉によって精査することで、数値と同じようなエビデンスが伝えられると思う。
- 複数名の意見で内容をもむことで、数値的でない形で現れたことを自分たちも再確認でき、次へもつながる。とても意義があった。（モチベーションが上がる効果もあるといわれている）
- いわれてみると、こういう効果が表れているんだとホッとする部分と、言われて初めてやったことがこういう形で表れているんだと認識できる。次へのステップとなる。

MSCに代表される参加型評価は、活動を改善させる学習効果や、参加した関係者の当事者意識やモチベーションを向上されるエンパワーメント効果があるといわれる。上記の文学座メンバーの感想からもそのことがうかがえる。

4 今後の課題

今回のMSC手法による評価調査は、新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、少人数で一度のみの実施となった。広く利害関係者からデータ収集を行ったわけではない。また最初に述べたように、定量的な調査は実施が不可能であった。感染拡大が収束した暁には、定量的なロジックモデル評価などと、MSCのような参加型・質的評価手法を併用することで、より客観的でバランスの取れた評価ができることが期待できると考える。

最後に、ご多忙中調査にご協力いただいた不破高校の教員の皆様と文学座メンバーに謝意を申し上げたい。

以上

ようやく、社会包摂が中央省庁の政策に

衛 紀生
（日本劇団協議会理事／
可児市文化創造センター ala 館長兼劇場総監督）

新国立劇場、可児市文化創造センター、リーズプレイハウスと、昨年可児市滞在で製作した日英共同制作『野兎たち―Missing　People』が、2020年3月16日午後のボリス・ジョンソン首相の緊急会見で英国内が一斉にロックダウンとなり、プレビュー３公演の後のプレスナイト開演1時間半前に中止となったのが、私にとってのコロナ禍の最初に実感した被害でした。リーズ―アムステルダム―パリ―ドゴール空港とキャンセル便をかいくぐって成田まで４０時間弱がかかりました。帰国したものの、ドゴール空港で感じたびりびりした緊張感は空港はもとより、日本の日常からは窺えませんでした。しかし、間もなく緊急事態宣言が発出されて文化芸術に関するソーシャル・ディスタンシングと「3密」に沿ったガイドラインが全国公文協から出ました。演技の際に俳優はマスクをする、というまったく当事者意識の欠落したもので、その後の第一次補正の際には、ネット配信により「芸術団体及び劇場音楽堂等の収支構造を変える」という、ここでも当事者意識に欠ける文言があり、ただただ呆れるばかりでした。

日本劇団協議会で継続していた「やってみようプロジェクト」もコロナ禍のあおりを受けて、各団体とも充分に満足のいく活動が出来たとは言い難く、各報告からも当該活動と感染対策のトレード・オフのあいだで苦渋したアーツワーカーの姿が浮かび上がっています。しかし、コロナ禍は悪いことばかりではなかった、と私には思えます。兵庫県立ピッコロ劇団と小野市うるおい交流館エクラと小野市国際交流協会で実施された在日外国人を対象とした『にほんごであそぼう』は、コロナ禍にあっても、自分たちの活動の足元を見返しながら、決して自己循環と自家撞着に陥らない冷静な判断をレポートから読み取れました。河嶋栄里子さん（NPO　法人小野市国際交流協会副理事長）の報告にあるように、2年目からの域内の各種団体への働きかけが、今年度のようにコロナ禍に見舞われたときにもプロジェクトの芯の強さを発揮していることが窺われます。河嶋さんの「地域に住む外国人の声はもとより、彼らが働く企業の担当者、外国人との共生に必要を感じている方々の思いを直接お聞きすることが出来た。それにより見えなかった部分での学びの機会をいただき」という箇所に私は、このプロジェクトに関わった人たちの思いの深さと目の前で起こることから学ぶ謙虚な姿勢を感じ取り、この試みはまだまだ進化すると確信しました。

アーツワーカーの役割を担ったピッコロ劇団の本田千恵子さんのプロジェクトが始まった当初の「私達演劇人に何が出来るのか？私は当初、日本語の学びの一環として日本の昔話を題材に芝居作りをする案を持っていた。しかし話し合いを重ねるうちに、何かが違うと感じ、取り下げた。彼らにとって数少ない日本人との交流、それがまさに私達なのだと気づく」という報告は胸を打ちます。多くの場合、演劇人に求められるのはお芝居を作ることと勘違いして、参加者との齟齬に気付くことなく走ってしまう例は枚挙に暇がないほどですが、このプロジェクトを担った人たちには「立ち止まる勇気」があり、「気付き」が生まれるだけの周囲を冷静に観察する謙虚さがあった事に、私は感動さえ覚えます。

ミッションを共有して、その実現のために組織・団体・機関が、それぞれの「強み」を持ち寄り、社会や個人に「変化」というアウトカムを実現する。これは専門用語で「コレクティブ・インパクト」と言います。そこには、良く使われる「巻き込む」という主体と「巻き込まれる」客体という主従にも似た関係はありません。組織・団体・機関の一人ひとりが「主役」であり、参加者のすべてが、たとえ事情で休むことが多い参加者たちも、一人ひとりが「主役」でなければなりません。

みんなで紡いだ『にほんごであそぼう』という物語の、皆が「主役」なのです。私は上記のお二人の報告から、まだ書き止しのこの「物語」は多彩なエピソードを生みながら、きっとこれからも書き継がれなければならない、と確信をしました。

可児市文化創造センターの館長に就任した１３年前から、「社会包摂型劇場経営」という前例のない経営に着手しました。その数年後から「自分のところでも」という声は上がったのですが、自分の劇場には社会包摂プログラムに割ける人員と専門家がいない、という声もほぼ同時にあがったのです。私どもの劇場も職員数は総務・舞台技術を含めても２３人です。自分のところだけで自己完結しようとするから「無理」、「難しい」となるのであって、地域には様々な団体や個人、そして機関があります。それらと手を組むことで、ネットワークは急拡大しますし、それにつれて応援したい、手伝いたいという活動の拡がりが域内に拡がります。誰も、何処も、ひとりぼっちでは何もできません。「つながる」ことです。それは、きっと私たちがコロナ禍の中を生きて、したたかに学んでいることなのではないでしょうか。

そして、昨秋には「やってみようプロジェクト」のような社会包摂プロジェクトが、高齢者の孤立防止に特化した形であるものの、社会処方事業として厚労省で２０２１年度から始まることになりました。有識者で組成された視察団は英国を訪れていて、その報告書も出ています。文化庁で政策化されたのではないところは口惜しいですが、ともかくも風穴はあいたと思っています。

参考資料（MSC評価アンケートフォーマット）

外国人対象 WS「にほんごであそぼう」MSC エピソード記入シート

日付：	記入者名：
エピソードのタイトル	

Q１－１　あなたの考えでは、昨年の WS から今年の WS までの間に、小野市に暮らす外国人の意識や行動に起った最も重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？

Q１－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

エピソードのタイトル	

Q２－１　あなたの考えでは、昨年の WS から今年の WS までの間に、その小野市民の外国人に対する意識や行動に起った最も重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？

Q２－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

エピソードのタイトル	

Q３－１　今回の WS の参加者で、最も印象的（＝意義深い）なエピソードは何ですか？

Q３－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

不破高等学校「文学座演劇ワークショップ」MSC エピソード記入シート

記入日：	記入者名：
エピソードのタイトル	

Q１－１　あなたの考えでは、不破高校で演劇ワークショップを始めてからこれまでの間に、生徒の自己表現・自己肯定感の向上に関して起った重大（＝意義深い）な変化のエピソードは何ですか？（５W１H などなるべく具体的に）

Q１－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

エピソードのタイトル	

Q２－１　あなたの考えでは、不破高校で演劇ワークショップを始めてからこれまでの間に、生徒のクラス・先生・地域とのコミュニケーションに関して起った重大な変化のエピソードは何ですか？（なるべく具体的に）

Q２－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

エピソードのタイトル	

Q３－１　あなたの考えでは、不破高校で演劇ワークショップを始めてからこれまでの間に、生徒の問題行動に関して気がついた変化のエピソードは何ですか？（なるべく具体的に）

Q３－２　あなたがその変化を重大だと思う理由をお書きください。

文化庁委託事業
令和２年度障害者による文化芸術活動推進事業
（文化芸術による共生社会の推進を含む）

やってみようプロジェクト

2021年3月
発行：公益社団法人日本劇団協議会
〒160-0023
東京都新宿区西新宿3-12-30　芸能花伝舎３F
TEL：03-5909-4600
FAX：03-5909-4666
監修：衛紀生　福島明夫
デザイン：西英一
印刷：株式会社平河工業社

演劇は社会の処方箋